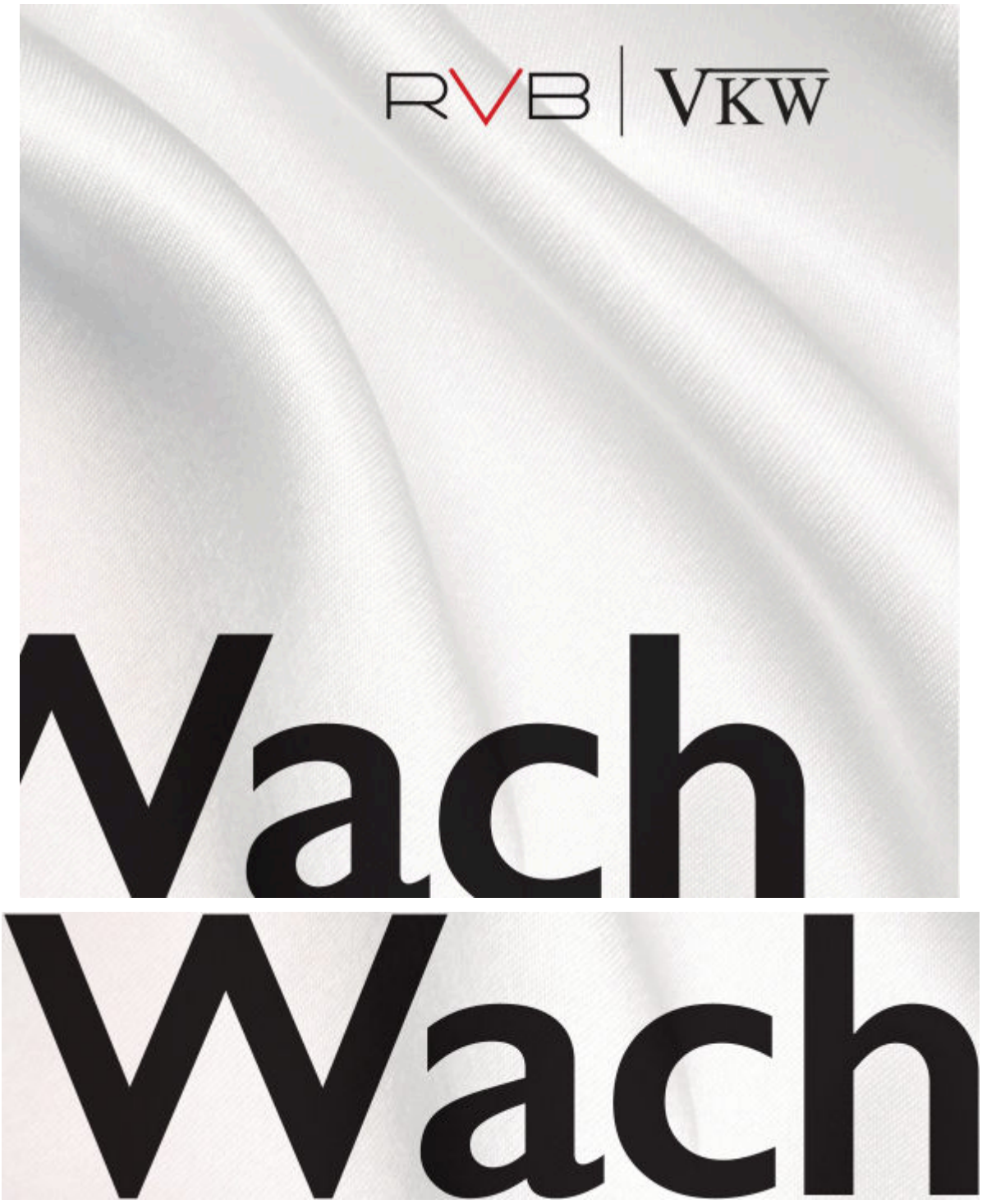
目覚めよ、エバ！（Wach auf, Eva!）



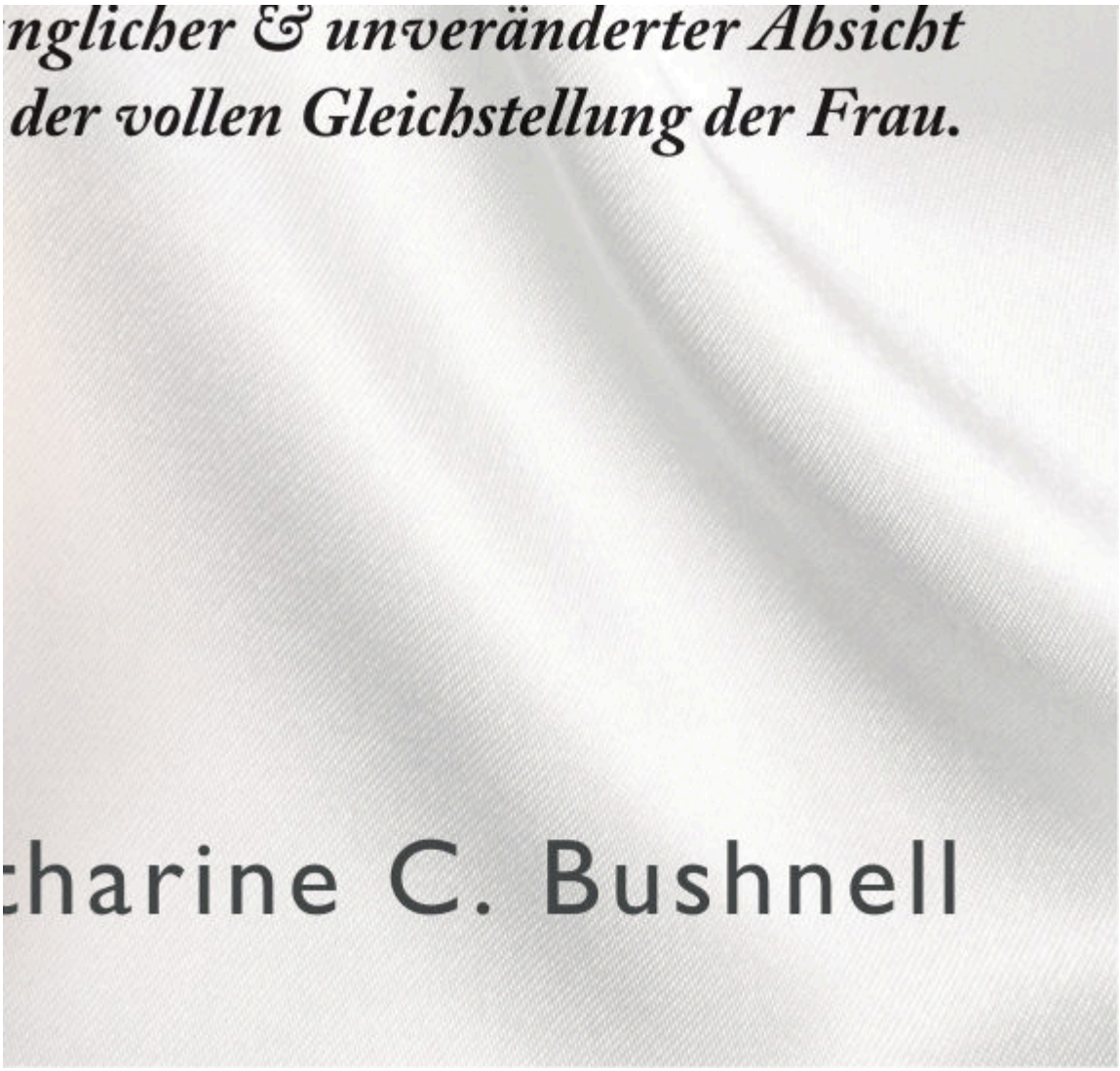

RVB
VKW
Nach
Wach


E
Erken


auf,
EVA!
ne die biblische Wahrheit von Gottes


auf,


ursprü
Kat



女性の完全な平等という、神の初めからの、そして変わることのない意図についての聖書的真理を知りなさい。

キャサリン・C・ブッシュネル（Katharine C. Bushnell）

キャサリン・C・ブッシュネル

目覚めよ、エバ！

この翻訳を、妻ザビーネと、私たちの娘たち、孫娘たちに献げます。

校閲をしてくれた妻に、表題と表紙デザインを手がけてくれた娘とその夫に、そして数えきれないほどの語り合いをしてくれた三人全員に、特別な感謝を献げます。その語り合いがなければ、このプロジェクトは決して実現しなかったでしょう。

キャサリン・C・ブッシュネル

目覚めよ、エバ！

女性の完全な平等という、神の初めからの、そして変わることのない意図についての聖書的真理を知りなさい

RVB

ドイツ国立図書館の書誌情報

ドイツ国立図書館は、この出版物をドイツ国家書誌に登録しています。詳しい書誌データはインターネットの http://dnb.ddb.de で閲覧できます。

ISBN 978-3-944472-25-6 (RVB)

ISBN 978-3-86269-206-4 (VKW)

© 翻訳：Reformatorischer Verlag

Friedensallee 76, 22765 Hamburg

英語原題：「God‘s Word to Women」

翻訳・組版・レイアウト：H・クリスチャン・ベーゼ（H. Christian Beese）

表紙デザイン：LUI & LEI Hamburg

表紙写真：

Takayuki Ohara / EyeEm, Getty Images

blacked, Getty Images

聖書の引用は、特に断りのない限り、すべてエルバーフェルト訳聖書（Elberfelder Bibel〔ドイツ語聖書翻訳〕）によります

印刷：CPI

RVB

Hamburg Bonn

著者について

キャサリン・C・ブッシュネル（**Katharine C. Bushnell**）（1855–1946年）は、勇気と賜物にあふれた神のしもべであり、「私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです」という聖句を生涯のモットーとしていました。彼女は医師、宣教師、十字架の使者、改革者、著述家、講演者であり、また七つの言語を話し、古典ギリシア語とヘブライ語を自在に使いこなした、卓越した独創的な学者でもありました。ブッシュネルは医療の道を離れ、自分がさらに重要だと考えた働きに身を投じました。すなわち、19世紀の女性運動の一翼を担った Women‘s Christian Temperance Union（WCTU、キリスト教婦人矯風会）で指導的な役割を担い、人々の屈辱的な生活条件を変えようとしたのです。女性の聖書的な立場は、ブッシュネルにとって非常に重要な問題でした。というのも彼女は、誤訳こそが女性の社会的・霊的な従属の原因になっているという結論に達したからです。1896年に彼女はWCTUを離れ、残りの生涯を、女性の完全な

平等という、神の初めからの、そして変わることのない意図についての聖書的真理を書き記し、伝えるという務めに献げました。

キャサリン・ブッシュネルの **God‘s Word to Women** は、女性に関するあらゆる聖書箇所を丹念に調べた画期的な研究です。ジェシー・ペン＝ルイス（Jessie Penn-Lewis）は、本書の内容が、神から直接与えられた啓示としか言いようのない仕方で聖書を開いてくれた、と語りました。今日多くの人にとって、これは、神が召してくださった自分であることの自由、そして聖霊が心に置いてくださった働きをする自由を与えてくれた本なのです。

> 「キャサリン・ブッシュネルは、自分の生涯はほとんど影響を残さなかったと思いながら世を去りました。しかし神はもっとよくご存じでした。」

中国で宣教医として働いていたとき、ブッシュネルは、中国語聖書が女性の奉仕に対する文化的偏見を強めるように誤って訳されていることに気づきました。彼女は、同じ男性の偏見が英語の翻訳にも影響を与えているのではないかと考え、ヘブライ語とギリシア語の研究を深めました。後にWCTUのために世界中を旅したときも、汽車や船の中で、また宿泊先で過ごす時間を用いて、聖書の翻訳を原語の文言と丹念に比較しました。

経験と研究を通して、神はキャサリン・ブッシュネルが God‘s Word to Women を書くための備えをなさいました。1908年に通信講座として始まったこの本は、最初はブッシュネル自身によって自費出版されました。初期には好意的な反応があったにもかかわらず、この本はやがて姿を消し、ブッシュネルは、自分の生涯はほとんど影響を残さなかったと思いながら世を去りました。しかし神はもっとよくご存じでした！ この本は再発見され、その計り知れない価値を認める人々によって今も出版され続けています。今日この本は、女性の聖書的な平等のために最前線で働く人々にとっての基本的な文献として、ついにふさわしい評価を受けているのです。

目次

課		ページ
	現在の編者・翻訳者による序言	11
	1943年版への序文	15
	著者の序文	19
1	基本的なこと	21
2	（正当な、そして不当な）本文批評	25
3	事実と作り話	29
4	悪の始まり	33
5	「あばら骨」の作り話	37
6	結婚についての神の律法（創世記2章24節）	41
7	結婚についての神の律法（結び）	45

課		ページ
8	太古における女性の尊厳	49
9	エバの選択とアダムの選択（創世記3章）	53
10	エバ、信じる者となる	57
11	エバと彼女を中傷する者たち	61
12	アダムとエバのふるまいについての聖書の教え	65
13	神は女をのろわれたのか？	69
14	誤った解釈（創世記3章16節）	73
15	サタンは待ち伏せしている	77
16	エバへの神の警告	81
17	Teshuqah の古代の翻訳	85
18	Teshuqah の翻訳の歴史	89
19	図表による概観	93
20	隷属させられていない妻たち	95
21	最初の家族における分裂	99
22	最初の罪とその実	103
23	小さな前提からの大きな結論	107
24	小さな前提からの大きな結論（結び）	111
25	女性は黙っているべきか？	115
26	女性は黙っているべきか？（コリント人への手紙第一14章34節）	119
27	女性は黙っているべきか？（続き）	123
28	女性は黙っているべきか？（結び）	127
29	ベールをめぐる詭弁	131
30	ベールをめぐる詭弁（続き）	135
31	ベールをめぐる詭弁（結び）	139
32	ベールについてパウロが本当に教えていること	143
33	ベールについてパウロが本当に教えていること（結び）	147
34	「権威」はどのようにして「ベール」になったのか	151
35	「権威」はどのようにして「ベール」になったのか（結び）	155
36	旧約聖書における「かしら」であること	159

課		ページ
37	新約聖書における「かしら」であること	163
38	「従う」とは何を意味するのか？	167
39	女性は服従しなければならないのか？	171
40	女性についてテモテに語ったパウロのことば（テモテへの手紙第一2章8–15節）	175
41	歴史の光に照らしたテモテへのパウロのことば	179
42	歴史の光に照らしたテモテへのパウロのことば（結び）	183
43	テモテへのパウロのことばの解説	187
44	テモテへのパウロのことばの解説（続き）	191
45	テモテへのパウロのことばの解説（結び）	195
46	パウロの論理のための不要な弁解	199
47	夫が「かしら」であることについての結びの考察	203
48	「異なる二種類の重り」	207
49	私たちの信仰は原典に基づかなければならない	211
50	へりくだりの授業	213
51	へりくだりの授業（結び）	217
52	柔和とは何か？	221
53	女性にとっての柔和とへりくだり	225
54	女性の歴史において新たに発見された章	229
55	族内婚と族外婚	233
56	族外婚の起源	237
57	族外婚の本当の原因	241
58	先史時代における女性の尊厳のさらなる証拠	245
59	さらなる証拠……（結び）	249
60	先史時代の女性についてさらに	253
61	親族関係は母方の系統で数えられる	257
62	父方の親族系統への移行	261
63	「彼の時代の者で、だれが思ったことか」	265
64	人類の歴史で最もよく証言された出来事	269
65	処女降誕	273

課		ページ
66	キリスト教的家庭を築く	277
67	キリスト教的家庭を築く（続き）	281
68	キリスト教的家庭を築く（続き）	285
69	キリスト教的家庭を築く（結び）	289
70	イサクとリベカ	293
71	モーセの立法は理想ではなかった	297
72	モーセの定めと女性たち	301
73	モーセの定めと女性たち（結び）	305
74	旧約聖書と一夫多妻	309
75	旧約聖書と一夫多妻（結び）	313
76	古代とその後の時代の女性たち	317
77	性的偏見が翻訳者に影響を与える	321
78	性的偏見が翻訳者に影響を与える（続き）	325
79	性的偏見が翻訳者に影響を与える（結び）	329
80	「ヤエルは祝福される」	331
81	「神にとって不可能なことは何もありません」	335
82	「神にとって不可能なことは何もありません」（結び）	339
83	Pericope de Adultura（ヨハネの福音書8章1–11節）	343
84	Pericope の真正性	347
85	「ほつれた裂け目」	351
86	「できない」か「しない」か（マタイの福音書19章11節）	355
87	緊急事態のための助言（コリント人への手紙第一7章）	359
88	旧約聖書の女預言者	363
89	女性は説教してもよい	367
90	女性は説教し、教えなければならない	371
91	女性たちも証人だった	375
92	女性たちも証人だった（結び）	379
93	女性たちは証人として備えられる	383
94	女性たちは証人として油を注がれる	387

課		ページ
95	女性の大いなる使命	391
96	女性へのさらなる油注ぎ	395
97	聖書の予告の本質	399
98	「巨大なしるし」	403
99	「その女」とはだれか？	407
100	長子の権利か、一杯の煮物か？	411
	付録：	
	聖書箇所索引	415
	事項・人名索引	430
	Teshuqah 図表	461
	第49課と第79課の翻訳で省略された段落	463
	キャサリン・ブッシュネル略年譜	467

ドイツ語版の編者・翻訳者による序言

聖書に忠実な立場からの、また一冊の「女性本」ですか？ そういう本はもう十分あるのではないでしょうか？ そうかもしれません。しかしそれらは（ほぼ）すべて、ただ一つの同じ見方を代表しています。いわゆる「補完主義」の見方です。この言葉は、互いに補い合うこと、男性と女性が対等な目線で向き合うことを思わせます。しかしよく考えてみると、これは婉曲語法であることがわかります。ウィキペディアによれば、「婉曲語法（あるいは婉曲表現、美化、言い逃れの言葉、覆い隠す言葉、粉飾とも言う）とは、人物、人々の集団、事物や事柄を、美化し、和らげ、あるいは覆い隠す意図をもって言い表す言語表現」です。「補完主義」という表現は、まさにそれをしています。この言葉は、女性が男性に一方的に従属させられているという事態を、美化し、和らげ、覆い隠す意図をもって言い表しているのです。この言葉自体は比較的新しいものですが、その事柄、すなわちその背後に隠れている教えは、非常に古いものです。ただし、ある人々が言いたがるように創造と同じほど古いわけではなく、堕落と同じほど古いわけでさえありません。

アメリカでは、聖書に忠実なキリスト者の間で、一方の「補完主義者」と他方の「平等主義者」との間に、すでに長らく活発な議論が交わされています。ドイツではこの議論はまだ始まったばかりです。現在、福音派の世界の広い範囲で、「補完主義的」な見方が誰にも挑戦されることなく制空権を握っています。本書は「平等主義的」な見方を力強く弁護するものです。

妻が夫に、さらには一般に女性が男性に従属し、服従し、従うべきだという教えは、聖書に忠実な多くの福音派のサークルで、正統信仰に欠かせない（sine-qua-non）構成要素として定着しています。この教えはパウロの手紙とペテロの手紙第一のいくつかの節に依拠していますが、さらにさかのぼって創造の物語、すなわち創世記の最初の数章にまで及び、ついにはその教理を聖なる

三位一体の内的構造にまで結びつけています。その際この教えは、暗黙にであれ明示的にであれ、エバのより大きな「原罪責」を前提としています。それが今日に至るまで女性という性に絶えず重荷を負わせ、損なっており、地上の贖われた教会の生活における平等を妨げている、というのです。このような考え方によって、ゴルゴタの十字架におけるキリストの代理的な贖いのいけにえの及ぶ範囲と効力が疑問に付されてしまう以上、この議論で問われているのは、キリスト教信仰の土台そのものにほかなりません。その意味で、補完主義を断固として主張する人々には、むしろ感謝してもよいほどです。彼らは、男性を事実上（de facto）女性とキリストとの間の仲介者として描くことで、聞く耳のあるすべての人に、この教えの非福音的な性格をあからさまに示しているからです。そうすることで彼らは、神は唯一であり、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスである、というパウロの教え（テモテへの手紙第一2章5節）に反しているのです。

ドイツにおける比較的新しく、まだもろい改革派の運動も、こうした考え方から免れてはいません。さまざまな経路を通して、とりわけアメリカの福音派と新カルヴァン主義から、この教えはこの運動の救済論的、人間論的、教会論的な土台に深く入り込んでいます。そのため、霊的な母乳とともにこの教えを吸収した多くの人は、女性の立場についてのこのような考え方の外にある信仰を、もはや想像することができなくなっています。

一つの現象は、教会の女性たちまでもがこの見方を熱心に擁護していることです。「真の女らしさ」「神の御心にかなう女性」などなど、さらに一連の婉曲語法がここで持ち出されていることを考えれば、それはそれほど不可解なことではなく、心理的にも理解できます。

もう一つの現象は、「補完主義」に不信感や批判的な態度を抱いている人々でさえ、たいていは口をつぐみ、この問題についての議論を避けていることです。この議論は、「補完主義者」の側からしばしば不公正な武器をもって行われます。別の見方を主張する人は誰でも、反射的に、「神の明白なことば」を無視し「神の秩序」に反逆する自由主義者、近代主義者、フェミニストと分類されてしまうのです。キリスト者の女性の一方的な従属を支持する、わかりやすく論理的に納得できる議論が欠けているので、主権的な神の予定と選びを一貫して否定する人々でさえ、「女性問題」に関してだけは、神が「位階的秩序」を定められたその主権的な自由を好んで持ち出します。

この問題全体には、パウロが手紙の中で倦むことなく告発し、闘った、あの律法主義の強い風が吹いています。インターネットでは、このテーマについての連続説教がまるごと見つかります。ある説教で、牧師は、パウロが「ベール」で何を意味していたのか「私たちにはわからない」と認めています。それでも、「従順であり、安全な側にいる」ために、すべての女性は念のため礼拝でかぶり物をするべきだ、そして「牧師の妻たちがすでに良い模範を示している」と言うのです。

「補完主義」の霊的な「制空権」の脇を固めているのは、錚々たる名前と、高い評価を受けて広く読まれている、その他の点では良い注解書、スタディバイブル、教義学書です。しかしよく見ると、それらには一つの目立つ特徴があります。霊的な教えのほとんどすべてのテーマや側面については、言語学的・釈義的な小石一つに至るまで裏返して調べ尽くされるのに、「女性問題」については、穏やかに言えばある種のずさんさが、あるいはほとんど操作的な釈義上のずる賢さとでも言えるものが支配しているのです。たとえば、ウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）がその

『組織神学』（Biblische Dogmatik）の中で、創世記2章18節の「助け手」（Gehilfin、女性の補助者を思わせるドイツ語）が本来は「助ける者」（Helfer、ヘブライ語 `ezer）を意味するという、決して小さくない点について書いているとします。彼は、この言葉が神ご自身にしばしば用いられると正しく説明しながら、「誰かが他の人を助けるときにはいつでも……助ける人は、助けられる人に対して従属的で低い立場に立つ」と書いています。これは、他の文脈では非常に有能な知性にふさわしくないばかりか、私たちの偉大な助け手である神をおとしめることです。あるいは別の解釈者が、アダムがエバに二度名前をつけていること（「女」〔Männin〕と「エバ、生きるものすべての母」）から、女性に対する男性の一般的な優越と支配の要求を導き出すとします。旧約聖書の中で人々が、大きな救いの体験の後に自発的に神に名前をつけることがしばしばあったという事実を考えれば、これはばかげたことです。これらは最近の著作からの二つの例です。さらに多くの例を挙げることもできますが、ここまでにしておきます。

初期のキリスト者も、教父たちも、宗教改革者たちも、皆そろって「補完主義」の見方をしていたのであり、「女性問題」について別の見方をあえてする者は誰でも、2000年の教会史と衝突することになる、という議論をよく耳にします。確かに、多くの教父たちは女性について非常に疑わしい見方をしており、16世紀の宗教改革者たちもこの問題に新しい光をもたらすことはまったくありませんでした。しかし、もし私たちが期間の長さをある教えの妥当性の論拠として認めるなら、宗教改革は決してあってはならなかったことになります。あの偉大な宗教改革もまた、何世紀にもわたって保たれてきた、しっかりと定着した誤った教えを問い直すことだったからです。「女性問題」についても、教会の中の両方の性の益のために、凝り固まった思考の枠組みが打ち破られ、私たちが召されているキリスト教的自由（性に基づく偏見からの自由をも含む）の新しい霊が入ってくる時が来ることを願っています。

西洋諸国でこの教えに与えられている重みは、少なからず文明の、あるいは豊かさの現象でもあります。たとえばイランや中国のような国々からは、極めて困難な条件の下での福音の伝播と若い教会の建設において、女性たちが平均をはるかに超える大きな役割を果たしているという報告が届いています。

キャサリン・ブッシュネルは、もともと20世紀初頭に通信講座として出版されたこの本の中で、私たちを聖書を巡る旅へ、創世記から黙示録まで連れて行ってくれます。その際彼女は、「女性問題」に関わる数えきれないほどの聖書箇所を扱います。聖書の言語についての確かな知識と長年の研究によって、彼女は謎めいて見える多くの聖書箇所に新しい光を当てています。さらに彼女は、いわゆる歴史的批判的研究とダーウィン主義の双方の議論の多くにも取り組んでいます。彼女は同時代の多くの自然科学者や文化人類学者を引用しています。広く旅をした宣教医であり福音の使者でもあった彼女は、くり返し個人的な体験と実践的な洞察を織り込んでいます。

本書は、自習と復習へと誘うように意図して構成されています。100の課の（ほぼ）すべてが、自分のメモを書く欄で終わっており、巻末には詳しい聖書箇所索引と、語句の説明つきの事項・人名索引が付いています。

キャサリン・ブッシュネルはくり返し、姉妹たちに向けて、聖書の言語の研究に打ち込むよう、熱のこもった、十分な根拠のある呼びかけを差し挟んでいます。男性たちが「神のことばはあな

たがたにこう言っている」と言うことではなく、神のことばが本当に彼女たちに言っていることを読むためです。私はこう確信しています。私たちが待ち望み、祈り求めている霊的な覚醒を経験する前に、私たちの教会は、この極めて重要な問題について方向転換を経験しなければなりません。そうして女性たちが沈黙と日陰の存在から解放され、福音における対等な同労者として、神から与えられた召しに従うことができるようになるためです。

H・クリスチャン・ベーゼ（H. Christian Beese）、ハンブルク、2020年10月

第6課――結婚についての神の律法

> 「それゆえ、男〔夫〕は父と母を離れ、その妻と結ばれる。」

45 創世記2章24節にあるこの結婚についての基本的な律法に従っていれば、女性は単なる所有物になることから守られ、こうして人類全体がより高い道徳的水準に保たれていたことでしょう。今日でも、もし宣教師たちが改宗者たちに聖書の結婚の律法を守るよう求めるなら、異教の諸民族の道徳的尊厳のためにどれほどのことが達成できるか、考えてみてください。東洋の女性たちが受けている抑圧を和らげるのに役立つ要因は、次のようなものでしょう。(1) 稼ぎ手である夫は、妻の家において経済的な価値を持つことになります。ところが今は、養わなければならない子どもをさらに次々と産む者として、妻が虐待にさらされています。とりわけ娘を産んだときにはそうです。(2) 男性は、まだ生まれていない子どもや乳飲み子、あるいは無力な幼い子どもたちの群れに縛られていないので、よその家で奴隷にされることはありえないでしょう。彼は出て行って、助けを必要とする妻と子どもたちの扶養を、彼をひどく扱う者たちに任せてしまうからです。しかし母であることによる束縛と母の愛の力とが、母親たちを、彼女たちを奴隷にしようとする者たちの犠牲者にしてしまうのです。(3) 男性は、力ずくで貞操を奪われたり、その身がよその家庭にとって利益をもたらす商品にされたりするようにはできていません。しかしこうした悪は、亡くなった夫のよその家に残されたやもめたちにあまりにもしばしば降りかかるので、東洋のいくつかの国々、特にインドでは、「やもめ」という言葉そのものが悪評を帯びているほどです。(4) 妊娠と出産の間、母親は、自分の母親のもとにいれば、それが父親の屋根の下であれその近くであれ、たいていは愛情深く世話を受けます。しかしよその家では、そのようなときにしばしば恥ずべきほどなおざりにされます。そしてそれは、長い目で見れば人類全体を弱くします。(5) 娘を結婚後も家にとどめ、息子を結婚後に家から送り出すという慣習は、幼児婚を大いに抑制することになるでしょう。親たちは、家族の繁栄に貢献する家族の一員を、そう早々と手放しはしないはずだからです。

46 すべての女性は、この点において神のことばが初めに世界を女性にとって良い場所とし、人類の歴史の初期段階で、この結婚の律法によって女性がおとしめられることに大きな歯止めをかけたのだということを知るべきです。これはまさに、人間の生き方に関する最初の社会倫理的な律法なのです。さらに、人類史の最も初期の時代には、この律法が、わずかな例外を除いて、今日のような死文ではなかったことが、研究によってますます確かめられています。夫は妻の両親の屋根の下で暮らすか、あるいはそこを頻繁に訪ねるのが普通でした。妻が両親の保護を離れることは決してなかったのです。結婚した娘たちの「自然な保護者」は両親でした。夫ではありません。

夫は、寄せられた信頼に値しないことが少なくなかったからです。太古の慣習は、夫が妻をふさわしく世話する能力を実際に証明するまでは、ある程度の健全な不信感をもって彼をよそ者と見なすことでした。

> 「結婚した娘たちの『自然な保護者』は両親でした。夫ではありません。夫は、寄せられた信頼に値しないことが少なくなかったからです。」

47 女性が結婚後も自分の親族のもとに、あるいはその近くにとどまる（したがって家族が彼女の「自然な保護者」である）ことの最大の利点は、何よりも、それが社会の道徳を強めることにあるでしょう。数年前、私たちの国の最大級の都市の一つで、ある医師が警察の協力を得て、その都市の「社会悪」を徹底的に調査し、いかがわしい境遇にある何百人もの女性や少女たちの証言を分析して発表しました。引用するためのその本は手元にありませんが、私の記憶が正しければ、彼の結論は、悪い男との結婚が売春のよくある原因だということでした。若い娘たちは、自分と寝た男たちと、その人柄についてあまり考えることも知ることもなく結婚しました。そしてその後、結婚によって夫に対してあまりにも不利な立場に置かれたので、暴力によって、あるいは心配のあまり、街頭に追いやられ、〔男たちの〕不道徳によって金を稼ぐことになりかねなかったのです。夫はもともと、妻にそのような仕方で生計を立てさせるつもりで結婚したのではなかったかもしれません。しかし彼自身に本当の礼節の感覚がなかったので、苦しいときに、なぜ妻が不道徳な仕方で生計を助けてはいけないのか、その理由がわからなかったのです。まさにこのような非常事態に対処するために、そうした危険が迫ったときには、女性の親族に介入する権利があるべきです。結婚の律法は、親族が娘や姉妹と密接な接触を保てるようにするべきなのです。しかし今の状況では、そのような男は、その気になれば妻を地の果てまで連れ去ることができ、誰もそれを止めることができません。

48 それがどんな結果を招きうるかを知るには、東洋の大都市を一つ訪ねてみさえすればよいのです。一つの例を挙げるだけにしますが、私たちがかつて、そうした東洋の大都市の一つで、暗くなってから悪名高い通りを訪ねたときのことを、私はそう簡単には忘れないでしょう。私たちが見た多くの不幸な娘たちのうち、かなりの数が、東洋の商社の立派な卸売商人と結婚したと思い込んでいた若い女性たちであることがわかりました。奴隷狩りの者たちが、ヨーロッパ、イギリス、アメリカの村々でこの娘たちを見つけ、彼女たちと寝て、正式な結婚式を挙げ、それから東洋の奴隷市場へ連れて来たのです。毎晩決まって、彼女たちの「夫」たちは自分たちが所有する家々を回り、夜のためにすべてが整っているかを確かめました。それから近くのクラブハウス（私たちは彼らの留守中にそこを見学しました）へ行き、奴隷にされた女性たちが稼いだ金で飲み食いして騒ぎ、たっぷり酒盛りをした後、午前二時か三時に戻って来て、奴隷にされた妻たちがその間に稼いだ金を一セント残らず取り上げました。金額がいつもより少ないと、しばしば彼女たちを鞭で打ちました。悪い夫から女性を十分に保護することを保証する結婚の法律ができるまで、白人奴隷売買が致命的な打撃を受けることは決してないでしょう。そしてそのような保護は、女性の親族が、まっとうな人々であるなら、法律によって彼女の「自然な保護者」と認められるまでは、十分なものにはなりません。そうなれば親族は、移住が家族の判断に反する場合には――たとえ過度に人を信じやすい妻自身が行く気になっていても――男が妻を外国に連れて行

くことを許さないでしょう。つまり、彼が法廷でその正当な理由を示すことができない限りは、ということです。

> 「神の結婚の律法は、ご自分の娘たちに対する神の父としての配慮と守りについて、なんと多くのことを私たちに教えてくれることでしょう！」

49 まさにこの夫婦関係の悪用が、合衆国の太平洋沿岸の日本人の間で（しかも痛ましいほどに）見られます。日本には秘密の結婚斡旋業者があり、結婚するためにアメリカへ渡る日本人の娘たちを絶えず探しています。またこの業者の男たちは、娘たちと結婚してアメリカへ連れて行くために、くり返し日本に戻って来ます。こうした日本人の男たちは良い家柄の出であることも多いのですが、彼ら自身は外国に滞在するうちに堕落してしまったのです。彼らが良い家の出であることを知っているので、娘たちの親は、彼らが結婚後に娘をよく扱ってくれるだろうと信頼します。こうしてこの娘たちは罠にかかります。そして毎晩アメリカで、街頭や日本人の安宿へと追いやられ、まっとうに結婚したはずのこの「夫」たちのために金を稼がされるのです。これは作り話ではありません。私はキリスト者の日本人紳士たち、キリスト者の宣教師たち、日本の領事たち、そうした人々の証言によってそれを知っているのです。

神の結婚の律法は、ご自分の娘たちに対する神の父としての配慮と守りについて、なんと多くのことを私たちに教えてくれることでしょう！ まさに初めから、神が最初に語られた戒めは、神が女性の権利と尊厳を心にかけておられることを示しているのです。

第7課――結婚についての神の律法（結び）

50 神は、人間の結婚が、キリストと教会、すなわちキリストの花嫁である「新しいエルサレム」との一致を予表する象徴となることを望まれました。キリストは、御父のもとで持っておられたすべての栄光を脱ぎ捨て、私たちと一つになるためにこの地上に来られました。しかし結婚は、キリストの最初の来臨を象徴するだけでなく、その再臨という考えをも含むべきものでした。両方を合わせて初めて、予型は対型を完全に映し出すのです。キリスト者の結婚はどれも、この二つの出来事に敬意を表すべきです。夫が親族との絆から離れることは、妻が出産と子育ての危険を引き受けることによって自己愛を放棄することに対する、釣り合いとなるべきものでした。パウロはエペソ人への手紙5章31–32節でそのことを教えています。そこで彼は、夫が妻のために親族を手放すべきだという義務を引用し、こう付け加えています。「私は、キリストと教会を指して言っているのです。」 アダムとエバは同時に創造され、初めは一緒にいて、それからアダムに臨んだ「深い眠り」の間に分けられました。同じようにキリストも私たちとともにおられ、それから死という「深い眠り」によって私たちから引き離されました。一方私たちは、流された主の血を信じる信仰によって、いわばよみがえられた主の脇腹から出て来たのです。アダムが分けられたのは、エバと再び一つになるためでした。しかもかつてないほどの大きな喜びのうちに――あまりの喜びに、その出来事を祝って思わず詩が口をついて出たほどでした。その詩をR・F・ホートン（R. F. Horton）博士は次のような韻文にしました。

> 「She, she is bone of my bone,

> And flesh of my flesh is she;
> 『Woman』 her name, which has grown
> Out of man,—out of me.“

51 そしていつの日か、キリストは「私たちの喜びのために」再び来られます。主が言われたとおり（ヨハネ16:7）、主が去って行き、再び戻って来られることは、私たちの「益」だったからです。そしていつの日か、私たちは今はわかっていないこと、すなわち、アダムがエバについてそう認めたように、キリストが私たちの「もう一人の自分」であることを悟るでしょう。「私たちはキリストのからだの部分だからです」。そして「主と交わる者」である私たちは、「一つの霊」でもあるのです。マグダラのマリアは、このことを体験として最初に発見した人だったようです。彼女は園の番人だと思った方に向かって、「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります」と叫んだのです。それは、性を超えた純潔な愛のうちに、主のからだを自分の正当な所有物として、無意識のうちに要求したことばでした。主がそのような愛に対してだけご自身を現すことがおできになったのも、不思議ではありません！（ヨハネ20:11–18）

52 キリストが地上におられたころには、花婿とその男の友人たちが婚礼の行列を組んで、花嫁を彼女の父の家から迎え、花婿自身の父の家へ連れて行くのが習慣でした。しかし十人の娘についてのキリストのたとえ（マタイ25:1–13）は、そのような神の律法の違反の姿を伝えてはいません。娘たちは花嫁の実家で待っており、花婿が来るという叫び声が上がると、彼を迎えに出て行き、花婿とその一行を花嫁の家での祝宴へと連れて来るのです。「通常、花嫁は花婿とその友人たちによって迎えに来られた。しかしここでは、花婿を迎えに行くのは娘たちの務めであり、婚礼は士師記14章10節のように花嫁の家で行われるようである」（デ・ヴェッテ〔De Wette〕、ランゲ〔Lange〕による引用）。キリストが再び来られるときも同じでしょう。主の来臨を待ち望み、それに備えている人々は、主の来臨を告げる叫び声とともに出て行き、「雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会う」のです。そしてそれから、花嫁の家である地上へ、婚宴のために戻って来て、そこで千年の間、主とともに生き、王として治めるのです（Ⅰテサロニケ4:17、黙示録20:6参照）。

神の結婚の律法が女性にどのような利点をもたらすかについて、私は単に推測を述べてきたのではありません。神の結婚の律法は、人類の最も初期の時代には守られていたのです。この事実を、考古学者たちが最近明らかにしつつあります。そして私は（紙幅の許す限り）彼らの発見を簡単に素描してみようと思います。

53 近代においてこのテーマについて最初に書いたのは、1861年、スイスの法律家バッハオーフェン（Bachofen）でした。J・F・マクレナン（J. F. McLennan）氏が英語圏で彼の知見の擁護者となり、さらにこのテーマについての自身の研究も発表しました。タイラー（Tylor）、ウェスターマーク（Westermarck）、フレーザー（Fraser）、エイヴベリー卿（Lord Avebury、サー・ジョン・ラボック〔Sir John Lubbock〕）、ロバートソン・スミス（Robertson Smith）など、他の多くの人々がそれに続きました。実際、初期のある民族についての近代の歴史書は、母権制と父権制が

ともに存在した時代から書き起こしていなければ、完全なものとは見なされません。創世記36章では、「エドムの首長たち」の何人かが女性であったことがわかります。

54 この初期の文明を特徴づける主な特色は三つあります。(1) 妻の両親は、彼女自身の親族とともに、生涯にわたって彼女の「自然な保護者」であり続けます。(2) 家の財産は女性たちによって守られます。(3) 親族の系統は男性ではなく女性によって数えられます。男性は結婚すると自分の親族から離れるからです。子どもたちは母親の家の名で知られます。この形態の文明は、しばしば「女系」という名で呼ばれます。上に挙げた三つ目の点が、他のすべてのことの原因だからです。たとえばマクレナンは、ギリシアの女性たちの社会的な地位の低下について語りながら、こう言っています。「女性による親族の系統がその古い重要性を保っていた限り、いかなる原因もそれを引き起こしえなかったことがわかる。他方、私たちは、男系が徐々に優位を増していったこと、そしてその優位がもたらした婚姻制度の変化の中に、その低下の十分な原因を認めることができる。」

55 では、女系から男系へのこの変化を引き起こしたのは何だったのか、という疑問が生じます。神の啓示を認めようとしない近代の進化論者たちは、最初に全般的な乱婚が広まり、どの男も自分の子どもを知らなかったので、その結果として女系だけが認められるようになったのだ、と言います。しかし代表的な進化論者であるダーウィン（Darwin）とスペンサー（Spencer）は、そのような乱婚が支配的だったことは一度もないと言っています。そしてこのことは、その理論に強く反する証拠となります。彼らこそが最も重要な進化論者だったからです。それに加えて、聖書は私たちに真理を啓示しているので、私たちは進化論者の理論についてあれこれ長く考える必要はありません。神の結婚の律法が初めに女系を確立したのです。そしてレメクのような忌まわしい人物が聖書に記されたのは、この結婚の律法の違反と一夫多妻の始まりを記録するため以外に、何の理由があったでしょうか？ 少し先の創世記6章の冒頭の数節では、女性たちを「まとめて」（「en gros」）自分のものにしたことが書かれています。そして記録によれば、「地は暴虐で満ちていた」のです。4章にあるように、レメクの息子は「青銅と鉄を鍛えた」者でした。そして鉄製の武器が最初に用いられたのは、女性たちを捕らえるためでした。こうして捕らえられた女性たちが親族から引き離されたとき、彼女たちとその子どもたちは夫の親族と同一視されました。こうして男系が生じたのです。大洪水でさえ、女性を捕らえる慣習を根絶しはしませんでした。士師記には、女性たちに対する罪のゆえにシセラと戦うデボラのことが書かれていますし、シセラの母については、息子が戦利品を携えて帰って来るのを待ち望んで見張っていたと言われているからです――「男一人あたり、娘一人、娘二人」。

56 A・C・ディクソン（A. C. Dixon）博士は、London Christian 誌（1911年11月16日）の記事でこう言っています。「神ご自身が打ち立てられたこの文明を見なさい。そうすれば、神が『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである』と言われるのが聞こえるでしょう。女性に優先的な地位が与えられているのです。父と母を離れて夫と結ばれるのは女ではありません。母と父を離れて妻と結ばれるのは男なのです。」一つの点で、私はディクソン博士に同意しません。神のこの結婚の律法に基づく文明は、女性を夫より上位にしたのではありませんでした。しかしそれは、女性が夫の部下になることを防いだのです。この関連で、ヤコブとその妻たち、レアとラケルの物語は教訓に富んでいます。彼が義父のもとを去ろうとするとき、彼

は妻たちに、一緒に来てくれるようへりくだって頼みます。そして彼女たちは、「夫について行くのが私たちの務めです」とは言わず、「私たちが行くべき理由は二つあります。父は私たちに相続分を与えてくれませんでした。そして父はヤコブの報酬を自分のものにしてしまいましたが、それは私たちと子どもたちに支払われるべきものでした」と言うのです（創世記31:14–16）。このことから、これらの女性たちが住んでいた所では、男たちが娘を結婚によって売り渡すことはなく、女性たちも、結婚したからといって夫に地の果てまでついて行く義務があるとは感じていなかったことがわかります。著名な言語学者たちは、アブラハムがサラについてアビメレクに（創世記20:13）言ったことばは、単に「神が私を……さまよわせたとき」ではなく、「神が彼女に、私とともにさまよい歩かせたので」であると言っています。意味の違いはこうです。当時は、妻が夫の放浪について行くことは期待されていませんでした。むしろその逆でした。神はサラとアブラハムの二人ともが偶像礼拝の環境から出て来ることを望まれました。それで神はサラにご自分の御心を啓示し、彼女が通常の慣習に従って親族のもとにとどまることのないようにされたのです。

> 「神のこの結婚の律法に基づく文明は、女性を夫より上位にしたのではありませんでした。しかしそれは、女性が夫の部下になることを防いだのです。」

第8課――太古における女性の尊厳

57 ケンブリッジ大学の教授ロバートソン・スミス（Robertson Smith）はこう書いています。「創世記によれば、結婚とは、男が父と母を離れて妻のもとに行き、二人が一体となることを含んでいる。これは、族長たちの歴史の他の部分に見られることと完全に一致している。マクレナン（McLennan）氏はヤコブの結婚を挙げている。そこではラバンが、ヤコブには妻たちとその子どもたちを連れ去る権利はないと言ったとき、明らかに法はラバンの側にあった。また、アブラハムが『イサクのための妻』を探したとき、そのしもべは、おそらくイサクが来て彼女の一族のもとに住むことが条件になるだろうと考えたという事実も挙げている。」〔この場合、アブラハムは同意することができませんでした。神が彼を、彼らの偶像礼拝からはっきりと呼び出されたからです。〕「ヨセフのエジプト人の妻から生まれた子どもたちは、養子縁組によって初めてイスラエル人となった。同様に、ペリシテ人の出であるサムソンの妻は自分の民のもとにとどまり、サムソンはそこへ彼女を訪ねて行く。これらすべてのことは、創世記2章24節で結婚の本来の型として示されていることを例証している。」そして私たちは問うことができるでしょう。「その妻と結ばれ、ふたりは一体となる」という、この太古の言い回しは、夫が妻と同じ血統に属するようになるということでないとすれば、いったい何を意味するのでしょうか？ 同じ著者はこう書いています。「母方の系統は血統の原型であり、共通の母であることは親族の一体性の原型であって、それがセム語の言語慣習全体を支配している。」神学博士J・P・ピーターズ（J. P. Peters, D.D.）は、創世記の同じ箇所についてこう書いています。「男と女の関係がここで描かれている仕方の中に、私たちは明らかに、この物語が非常に古いことを示す、そうした付随的な証拠をもう一つ持っている。父と母を離れて夫と結ばれるのは女ではなく、父と母を離れて妻と結ばれるのは男なのである。ここには古い母権制の名残があるように思われる。それは、サムソンの物語に一つの例が見られる婚姻関係であり、そこでは妻は自分の部族、氏族、あるいは家族のもとにとどまり、夫

がそこを訪ねるのである。そのような場合、子孫は夫の家族ではなく妻の家族に属する」（Early Hebrew Story、223頁）。

58 偉大な考古学者フリンダーズ・ピートリー（Flinders Petrie）教授も、このテーマについて興味深いことを書いています。私がこの件で誇張していないことを示すために、彼の文章を少し長めに引用します。彼はこう書いています。「私たちは、東洋の女性は――今日イスラム教の下でそうであるように――常に従属的であったという考えにあまりにも慣れてしまっているので、族長時代の初期の歴史の中に示されている、まったく異なる制度に目を開かなければならない。大まかに言えば、私たちの現在の制度は、一方では社会の中で男女が完全に混じり合っていながら、他方では男性がすべての権利と財産を保持しているものである。東洋の初期の理想は、男性と女性に別々の世界を定める一方、女性が自分自身の権利と自分のすべての財産を保持するというものであった。」

> 「母方の系統は血統の原型であり、共通の母であることは親族の一体性の原型である。」

59 ピートリー教授はさらにこう続けます。「旧約聖書[1]の中で〔エバのほかに〕一人の人格として登場する最初の女性は、その名が示すとおり『一族の長』であるサラである。サル（Sar）は、中東で今なお用いられている、首長を表す通常の古い呼び名である。……彼女の自立した地位は、彼女がアブラハムからまったく独立して、ファラオの宮殿やアビメレクの宮廷で暮らしたことから明らかである。後代の著者たちがこれを解釈によって片づけようとしても、近年ただ無視されてきたこの独立性を説明することはできない。

「サラはマムレに自分自身の住まいを持ってそこに住み、一方アブラハムはベエル・シェバに住んでいた。そして彼は、彼女のために悼み悲しみ、彼女を葬るためにやって来たと記されている。したがって旅の間の、また晩年の彼女の身分は、決して人目を避けた従属的なものではなく、独立した一族の長、すなわち『部族の母』のそれであった。

60 「サラには娘がいなかったので、一族を率いる者を家族の中から呼び寄せる必要があり、リベカが故郷から連れて来られた。サラの公式の天幕は、イサクによってマムレから三、四日の旅程のベエル・ラハイ・ロイへ移されており、リベカが来るとすぐに彼女はその天幕に迎え入れられた。その後イサクは彼女と結婚した。そして彼女はサラとまったく同じように独立していたようである。リベカには後継者となる娘がいなかったので、ヤコブは継承順位で年長のレアと結婚しなければならず、こうしてレアの地位が確保されるまではラケルを得ることができなかった。

61 「エジプトへ下る前には、十一人の息子たちの中でただ一人の娘だけが名を挙げられている。それはディナ、すなわち『女の裁き手』〔これがその名の意味です〕であり、一族の長レアの娘である。彼女がヒビ人[2]と結婚したことに兄弟たちは憤った。それによって彼女の裁き手としての職務が他の民の下に置かれることになるからである。そして割礼によってヒビ人をイスラエルの民に組み入れることによってのみ、事態を収拾することができた（創世記34:1–24）。さらに後代になっても、次の世代から名が挙げられている唯一の女性、セラフ（創世記46:17）の名の中に、この系統をたどることができる。これはサラ、すなわち『部族の指導者』の一形態である。ディナにはどうやら子どもがいなかったようなので、レアの女奴隷ジルパの子孫の女性を立てるのは自

然なことであった。こうして、レアがとりわけ喜んだアシェルが、その娘セラフによって次の一族の長を出したのである。」

62 女性のこの太古の尊厳の何がしかは、聖書の歴史の全体を通してたどることができます。とりわけ、王と並んで権力を行使した「王母」に見ることができます。紀元前600年になっても、エレミヤの時代に、エレミヤ書13章18節でそのことが語られています（ここではこの語がしばしば誤って「王妃」と訳されています）。

ヘブライ語より前にはアッカド語とシュメール語がありました。そしてセイス（Sayce）教授は、古代シュメールの賛歌をセム語に訳した翻訳者たちが、「女と男」を「男と女」に変え、男性に優位を与えるためにさらに同じような変更を加えたことを伝えています。シュメール、アッカド、バビロニア、アラビア、フェニキア、エジプト――これらすべての非常に古い文明は、母権制の特徴を帯びていました。サー・ウィリアム・ラムゼイ（Sir Wm. Ramsay）も小アジアについて同じことを言っています。女系はまた初期のギリシアにおいても証明することができます。スパルタの女性は、尊厳を失った最後の人々でした。紀元前450年ごろになってもなお、ヘロドトス（Herodot）はリュキア人についてこう書いています。「隣人に向かってあなたは誰かと尋ねれば、彼は自分はこれこれの母から生まれた者だと言い、母方の先祖を数え上げるであろう。」以前は、これは父親が複数の妻を持っていたためだと考えられていました。しかし今日では、それは正しい説明ではないことが強く主張されています。「兄弟」を表すギリシア語（adelphos）そのものが、父ではなく母を通しての親族関係を表しているのです。

63 私たちは神の律法からあまりにも遠く離れてしまったので、今日、イギリスの法律では、母親は親ではありません。エドワード6世の治世に、民事裁判所と教会裁判所が共同で、サフォーク公爵夫人は自分が産んだ息子の親族ではないと宣言しました。イングランド教会は離婚に厳しく反対しています。しかし、マタイの福音書19章で離婚に関する主イエスの定めを読むと、「そういうわけで、神が結び合わせたものを人が引き離してはなりません」という結論が、「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる」という前提に基づいていることがわかります。教会は、この定めが基づいている前提を無視している限り、その定めの結論〔離婚の禁止。訳者注〕を実効的に貫くことは決してできないでしょう。

64 私たちのヘブライ語の文法書や辞書は、民族を指すほとんどすべての集合名詞や、町や共同体の名前が女性形であることを指摘しています。どうしてそうなったのでしょうか。キリストの時代の男たちが、キリストが食べさせたあの群衆のような人々を表すのに女性形の言葉をつくり出したなどということは、まったく考えられないのですから。福音書の記録によれば、キリストは「女と子どもを除いて、男四千人」に食べさせました。また別の機会には、「女と子どもを除いて、男五千人」に食べさせました。さらに使徒の働きでは、ペテロ、ステパノ、パウロが、さまざまな機会に群衆に向かって「男の方々、兄弟たち」と呼びかけ、女性には触れさえしていません。男性がほとんど独占的に第一の地位を占めているときには、群衆の中で彼の性だけが言及されるのです。しかし、血統が女性によって数えられていた時代には、一つの血による民族や共同体に言及するとき、民族、町、共同体、群衆に女性形の呼び名が与えられたことは十分に理解できます。町や村などを表すこれらの集合名詞が女性形だったのは、そうした場所が女性たちの所

有する家々の集まりから成っていたからであり、女性たちはそこからめったに移り住むことがなかったからです。民数記21章25節やヨシュア記15章45節などで「町々」を表す言葉は「娘たち」です。同じ理由で、イザヤ書12章6節の「シオンに住む者」は、原文では「シオンに住む女」となっており、旧約聖書では同様の例が非常に多く見られます。

第9課——エバの選択とアダムの選択

65 「霊的な聖書批評」についての一連の有益な講義の中で、A・T・ピアソン（A. T. Pierson）博士はこう語りました。「知的な領域では、人はあることが真理であるからそれを信じる。霊的な領域では、人はあることを信じるからそれが真理であることを知る。」もしあなたがたが、真理を確信させてくださる御霊をともに持っているなら、そして今日の課で語られることを信じるなら、その真理を受け入れなさい。それに従って生き、それを他の人々に教えなさい。たとえそれが、あなたがたが以前に受けた教えや、身につけてしまったかもしれない偏見を完全にくつがえすものであってもです。

66 これらの課の文脈において、「天の御国で偉いのは男か女か」を知りたいというあらゆる望みを、ふさわしくない問いとして、きっぱりと退けましょう。しかし女性として、私たちは女性の使命に関心を持っていますし、また持つべきです。この使命はエデンの園で定められました。それはどのようなものでしょうか？

67 創世記2章17–18節を読んでください。両性が分けられる直前、アダムが責任を負える成熟に達し、自分の行いについて申し開きをする義務を負っていたとき、神は彼に「善悪の知識の木」から食べることを禁じられました。18節が示すように、エバはまだ「形造られて」いませんでした。命令は二人称単数で与えられたのです。この「木」が正確に何であったかは、私たちには告げられていません。「善と悪」という言葉は、サムエル記第二19章35節、ヨブ記2章10節、イザヤ書7章15–16節、エレミヤ書42章6節などの聖書箇所に出てくるように、実質的に「苦痛と快楽」と同じ意味であると考えてもよいでしょう。そのような律法にアダムが背いた結果は、一つには「苦痛」と「快楽」の間のはっきりした違いを発見することであり、もう一つには、これから先は快楽を求め、たとえ有益なものであってもあらゆる「苦痛」を避けようとする強い誘惑でしょう。もしかすると神は、アダムの注意を、単なる「苦痛と快楽」よりも高い動機と行動の原理へ向けようとされたのかもしれません。この禁令は、私たちがそのように解釈するなら、神がアダムに妻を添えられた出来事のすぐ前に置かれていたので、特別な意味を持っていました。とりわけ、両性の関係において責任の苦痛を避けることは非難されるべきです。それは個人の堕落を意味し、ついには人類の堕落を意味します。そしてそれは必ず、母となる性の側に苦しみと過重な負担をもたらすことになります。

68 エバは、この禁令がすでに語られた後に初めて「形造られ」ました。そして私たちは、彼女がその後全能者からそれを聞いたのか、それともアダムを通してだけそれを知ったのか、知らされていません。聖書の証言によれば、サタンが彼女をそそのかしてその戒めを破らせたとき、彼女はおそらくアダムを通してだけそれを聞いていたのでしょう。というのも、彼女はその指示をくり返すときにことばを飾り、律法の文言をある点では強め、別の点では弱めているからです。それ

は一次資料による報告ではなく、又聞きで伝えられた話の特徴です。結局二人ともその木から食べ、神が日の涼しいころに来られて、彼らに申し開きを求められました。神はアダムに尋ねられました。「あなたはあの木から食べたのか」。その答えはこうでした。「あなたが私のそばに置かれた女、彼女があの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」 それから神は女に尋ねられ、彼女は答えました。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べました。」 私が太字にしたことばに注意してください。

69 この二つの答えを対比することは正当だと私は考えます。その中に、続いて起こることへの手がかりが見いだされるからです。二人とも「私は食べました」と告白し、二人とも、食べることへと導いた直接の影響を正直に挙げています。そこまでは二人は対等です。しかしアダムは、それ以上のことを言わずにはいられないと感じています。エバを通して彼が罪に陥ったことには、第一原因がありました。サタンです。しかしアダムは、エバのようにはサタンに言及しません。それでいて第一原因について黙っているわけでもありません。彼は神の面前で直接、神ご自身がその第一原因であると非難しているのです――彼に女をそばに置かれたことによって。そして最も悪いのは、サタンがその会話の場に、あるいはその近くにいて、どうしても第一原因に触れなければならないのなら、見落とすことはできない、あるいは故意にしか見落とすことのできない存在だったということです。サタンは、アダムの神に対する態度と、アダムが暗に神を愚かだと責めたことを、アダムが誘惑者である自分に対してとった態度、すなわち自分を非難からかばってくれたことと同じくらい喜んだに違いありません。ヨブが「もし私が、アダムのように自分の背きをおおい、自分の咎を胸の内に隠したことがあるなら……」と嘆くとき（ヨブ31:33）、彼が言及しているのは、まさにこの出来事、アダムのこのふるまいではないでしょうか？ ランゲ（Lange）博士はこう言っています（第36段落参照）。「アダムは〔園を〕、すでに存在していた悪の力から見張り、守らなければならなかった。」アダムが、入り込むことのできたサタンに触れないのは、もしかするとそれが理由ではないでしょうか？

> 「アダムは神の面前で直接、神ご自身が堕落の第一原因であると非難しました――彼に女をそばに置かれたことによって。」

70 使命（定め）とは恐ろしい言葉です。人の運命は、一瞬の決断によって生涯にわたって決まってしまうことがあります。そしてその決断は――神の介入を願い求めない限り――後の世代にわたって、その子孫の生まれつきの傾向となることがあります。聖書では、それがイスラエル人とエドム人の教訓です。ヤコブの歴史のある時点までは、エサウの生き方のほうがヤコブの生き方よりも立派に見えました。しかしエサウは二つの道の分かれ目に立ったとき、長子の権利を代価にして肉体の元気回復を選びました（創世記25:29–34）。ずっと後になって、ヤコブが二つの道の分岐点に来たとき、たとえ一人きりで備えもないまま兄の殺意ある襲撃に不意を突かれる危険を冒してでも、彼は一晩中神の祝福を求めて格闘し（創世記32:24–32）、それを得ました。神は、この二人が生まれる前から、それぞれがどのような種類の決断をするかを見ておられ、その予知に基づいてご自分の「選び」をなさいました。今神は――このたびはアダムとエバの決断に基づいて――「選び」をしようとしておられます。それはちょうど、後の歴史において、ヤコブを来るべきメシアの父祖として選ばれたときと同じです。

71 アダムは悪い選択をしました。彼は蛇の側に立ち、神を中傷する者となりました。しかしエバは、サタンのいる前でその正体を暴き、こうして自分とサタンとの間に敵意を生じさせました。続いて起こったことは、エバのより良い選択の自然な結果でした。神は、女をサタンからさらに遠くへ引き離そうと決められました。神はサタンに言われました。「わたしは敵意を置く。おまえと女の間に」（3:15）。神は実質的にこう言われたのです。「彼女は決裂することを選んだ。わたしはその決裂を広げよう。」

この後に続く栄光ある約束については、すでに多くのことが語られてきました。しかし、立ち止まって考えてみましょう。少なからぬ解釈者が、そこに、人間と下等な動物である蛇との間には常に自然な敵意があるだろうということ以上の意味を見いださないのです！

72 神がこの時点で、サタンと女の間に敵意を置かれたことを忘れてはなりません。そのことが、次の節（3:16）で預言されている一連の悪の多くを説明します。もっとも伝統的な見方によれば、それらはエバが禁じられた実を食べ、夫にも与えることによって罪を世に持ち込んだことの結果だとされています。サタンの敵意こそが、女性の苦しみの原因なのです。この点については、後の課でさらに光が当てられます。

73 「おまえの子孫と女の子孫の間に」と、神は女に関して、サタンに向けたこのことばに付け加えられます。「神の普遍的な父性」と「人類の普遍的な兄弟愛」を強調するのが今日の常ですが、それは部分的には真実です。しかし聖書を権威として重んじる私たちは、神と同じようにサタンにも、人々の中に自分の子どもたち――道徳的・霊的な犯罪者たち――がいるということを忘れてはなりません。「良い種は御国の子どもたち、毒麦は悪い者の子どもたちです。」 ヨハネの福音書6章70節にはこうあります。「わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかし、あなたがたのうちの一人は悪魔です。」 ユダヤ人たちが「私たちにはひとりの父、神がいます」と言明したとき、イエスはこう答えられました。「神があなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。……あなたがたは、悪魔である父から出た者」（ヨハネ8:41–44）。愛の使徒ヨハネでさえ、すべての人が神の子どもだとは言わず、こう警告しています。「子どもたち、だれにも惑わされてはいけません。義を行う者は、キリストが正しい方であるのと同じように、正しい者です。罪を犯している者は、悪魔から出た者です。……このことによって、神の子どもと悪魔の子どもの区別がはっきりします」（Ⅰヨハネ3:7–8、10）。神は、堕落した教会の新しく生まれていない「私生子」（ヘブル12:8）を、ご自分の子どもとして受け入れることも認めることもなさいません。

74 「彼は〔女の子孫は〕おまえの頭を打ち砕き、おまえは、おまえは彼のかかとを打ち砕く。」古い翻訳では「soll」（～すべし。命令とも取れる語）という語が用いられていますが、明確さのために、両方の箇所で「wird」（～するであろう）としなければなりません。これは未来形であって、命令形ではないからです。神はサタンに、女の子孫のかかとを打ち砕くよう命じておられるのではありません。ただ、これらのことが起こると預言しておられるだけなのです。この預言は特に、処女マリアから生まれた、サタンの大いなる敵イエス・キリストを指しています。しかしそれはまた、すべての信仰者をも指しています。使徒パウロはこう言っているからです（ローマ

16:20)。「平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。」 このテーマは次の課で続けることにしましょう。

第11課――エバと彼女を中傷する者たち

82 もし本書の分量が許すなら、参事会員ペイン＝スミス（Payne-Smith）の注解に加えて、カインこそ来るべき方、メシアだというエバの信仰を扱っている他の注解者たちの興味深い論考を紹介することもできるでしょう。とりわけ価値があるのは、ボン大学のペーター・ランゲ（Peter Lange）博士と、その編者・翻訳者であるテイラー・ルイス（Tayler Lewis）博士の注解です。後者はこう書いています。「救い主の型というよりはむしろ反キリストの型であった者にその表現を当てはめたというエバの誤りは、契約の神がこれほどまでに超越的に異なる存在として啓示されている私たちにとって、本文の解釈に影響を及ぼすほどの衝撃であってはならない。エバの認識の限界と、おそらくは神的なものと人間的なものとを適切に区別できなかったことは、彼女の希望の強さと、彼女のことばの主観的な真実さを、いっそう強い光のもとに置いている。もし当時伝えられた彼女のことばに、約束された女の子孫を示唆するものが何も含まれていなかったなら、合理主義者たちは疑いなくそれを、彼女がそのような預言について何も知りえなかった証拠として持ち出し、したがって創世記3章15節と4章1節とは、互いのことを何も知らない、あるいは互いに矛盾する別々の著者によって書かれたに違いない、と主張したことであろう。」

83 アダムだけでなく、何よりもまず神のことばそのものが、エバは「生きるものすべての母」であったと言っています。デーリッチ（Delitzsch）はこれについてこう述べています。「約束は本当に女の子孫について語っている。脅かされている死に直面して、女はアダムにとって、人類の存続と勝利の両方を保証するものを意味している。」すべての信仰者が「女の子孫」であるという側面について、モンロー・ギブソン（Monroe Gibson）博士は「彼女の子孫とは誰か」と問いかけ、こう答えています。「多くの浅薄な読者は、彼女の子孫とは全人類のことだと考える。もちろんある意味では全人類が『女の子孫』である。しかしそれが全人類を含むのなら、蛇の子孫とは何を意味するのか。『女の子孫』が全人類を意味しえず、ただ文字どおりにだけでなく霊的にも『女の子孫』である人々、すなわち善の側、神と義の側に立つ人々を意味することは、まったく明らかではないか。反対の霊を持つ人々は蛇の子孫、『悪魔の子どもたち』である。同様に、『人は妻の名をエバと呼んだ。彼女が、生きるものすべての母だからである』〔3:20〕と読むとき、たいていの読者は、彼女がすべての人間の母であったという意味に理解する。しかし、なぜ彼は彼女に、それほど自明なことを言い表す名前をつけたのだろうか。他方、『生きるもの』を、文字どおりの意味と同時に霊的な意味でも、『神に対して生きている』人々、神が御子を通して与えられる『いのち』を持つことになる人々と理解するなら、すべての暗示がなんと見事に符合することだろう！『女の子孫』、『生きるものの母』、『アダムの歴史』。厳密に言えば、ヘブライ語には現在形はなく、過去と未来しかない。したがって未来形が用いられるとき、それは未来へと続いていく現在を表すことがある。それゆえここでは、『わたしは敵意を置くであろう』というだけでなく、わたしはおまえと女の間に敵意を置いている、ということでもあるのだ。その働きはすでに始まっている……。彼女は、神の教会を形づくるすべての個人の原型であり、その代表者なのである。」（The Ages before Moses、122頁）

84 では、私が選ぶことのできた多くの聖書箇所の中から、四つを比べてみましょう。神はアブラハムに語られます（創世記22:16–18）。「わたしは自分にかけて誓う。……あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」 イサクにはこう語られます。「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。これは、アブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの命令を守ったからである」（創世記26:4–5）。ヤコブにも同じことを語られました（創世記28:14）。ダビデにはこう語られます。「あなたの後にあなたの子孫を起こし……わたしはその王座をとこしえまでも堅く立てる」（Ⅰ歴代誌17:11–12）。そしてガラテヤ人への手紙3章29節。「あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」 人類に降り注ぐことになっていたこの祝福の流れの一部として名を挙げられたことは、アブラハム、イサク、ヤコブ、ダビデにとって特別な栄誉だったでしょうか？ それなら、この祝福の源が（人間の側では）エバであることを思い起こすのはよいことです。神はサタンに、彼女についてこう言われたのです。「わたしは敵意を置く。おまえと女の間に。……彼女の子孫は……おまえの頭を打ち砕く。」 この約束は、アブラハム、イサク、ヤコブと同じようにエバに栄誉を与えています。そしてその栄誉は、彼らの場合と同じ理由以外の理由で、すなわち彼女のうちに見いだされた優れた資質という理由以外で、彼女に与えられることはありえなかったのです。

85 次の課で私は、新約聖書が、罪を、そして罪による死を世界にもたらしたのはエバではなくアダムであると教えていることを示します。それならば、エバの人格に対するこの中傷はどのように説明できるのでしょうか？ その起源はどこにあるのでしょうか？ これらの問いへの答えはかなり単純だと私は思います。歴史的に見て、女性をあらゆる悪の源とする最も初期の決定的な告発は、異教ギリシアのパンドラの神話です。紀元前800年ごろに生きたヘシオドス（Hesiod）によれば、ユピテルは、プロメテウス（その名は「先に考える者」を意味します）が天から火を盗んだことに怒り、復讐のためにヘパイストスに美しい女を造るよう命じました。ミネルウァは彼女をあらゆる賜物で飾り、彼女はパンドラ（「すべてを授けられた者」の意味）と名づけられましたが、メルクリウスは彼女に欺く心を与えました。彼女はエピメテウス（「後から考える者」）のもとに連れて来られ、彼はプロメテウスの留守中に、警告に反して彼女を受け入れました。人間の間に迎え入れられると、パンドラは一つの壺を開け、人類のあらゆる悪を逃げ出させました。ただ欺きの希望だけが残りました。この神話には多くの異なる形がありますが、それらはすべて一つの見方を教えています。女が人間の悪の源である、というのです。

86 中間時代、すなわち旧約と新約の間の時代は、ユダヤ人の歴史において「混合の時代」でした。ユダヤ人たちが、旧約聖書の教えとユダヤ人の慣習を、ギリシアの異教と調和させようと努めたからです。大執事ファラー（Farrar）[3]は次のように伝えています。「当時パレスチナはギリシア人の町々の帯に囲まれており、そこでは多くのユダヤ人が異教徒の住民と自由に交わっていた。エルサレムそのものにおいても、シリアとエジプトのギリシア人の王たちと緊密に結びついた、裕福で力のある一派が成長しつつある。ギリシアの生活と文学の魅力にとりつかれた彼らは、ヘレニズムの理想を取り入れ、ユダヤ人の生活と信仰の最も本質的な特徴を消し去ろうとした。この半ば不信仰な時代は『混合の日々』と呼ばれた。」

87 ですから、この時代にパンドラの伝説と創世記のエバの記録とを調和させようとする試みがなされたことは、何ら珍しいことではありません。そして、エバを悪の源とする現存する最古の言及は、Ecclesiasticus（集会の書）またはシラ書として知られる外典の書に見られます。この書は年代不詳のパレスチナの作であり、もともとは、おそらく紀元前250年ごろにヘブライ語で書かれましたが、早くからエジプトでギリシア語に翻訳されました。そこには次のようなことばが含まれています。「罪は女から始まり、女のゆえに私たちは皆死ぬ」（25:24）。テナント（Tennant）は、「シラ書はタルムードの堕落の教えの先駆けであった」と述べています。[4] このタルムードの教えがエバについて何と言っているかを、すぐに抜粋で示します。ですから、この点を忘れないでください。

> 「エバを悪の源とする現存する最古の言及は、Ecclesiasticus（集会の書）またはシラ書として知られる外典の書に見られます。」

後代のユダヤ人の著者たちは、エバの罪責についてさらに詳しく論じています。とりわけアレクサンドリアでは、聖書をギリシアの異教の教えと調和させる試みがなされました。キリスト教神学にとって不幸なことに、アレクサンドリアで旧約聖書のギリシア語訳が完成した（紀元前285年開始）後、「外典」と呼ばれる、これらの霊感を受けていないユダヤ人の文書――すべてヘブライ語ではなくギリシア語で書かれたもの――がその訳に取り入れられ、その訳がヘブライ語の聖書を排除して教会で用いられました。教父たちの多くは外典を権威あるものとして引用しました。そして彼らは皆、その教えの影響を受けました。こうして、神話のパンドラの性格がエバに帰されることは容易に起こったのです。エバの人格についてのどんな言説も、「混合の日々」より前にさかのぼることはできません。

88 紀元177年にリヨンの司教であったエイレナイオス（Irenaeus）は、ベン・シラ（Ben Sirach）や他のユダヤ人の教えと一致して、エバについてこう言っています。「彼女は不従順になったので、自分自身にとっても全人類にとっても死の原因とされた。」しかし数年後、カルタゴのテルトゥリアヌス（Tertullian）は特に厳しく、次のようなことばで、エバの罪をすべてのキリスト者の女性に負わせています。「そしてあなたは、自分がエバであることを知ろうとしなかったのか。あなたの性に対する神の刑罰の宣告は今なおこの世に生き続けている。それならば、あなたの罪責もまた生き続けていなければならない。**悪魔に入口を与えたのは、あなたなのだ**。あなたはあの木の封印を破り、あなたが最初に神の律法を見捨て、悪魔が近づくことのできなかった者を惑わしたのもあなたである。こうもたやすく、あなたは神のかたちである男を地に打ち倒したのだ。あなたの罪責のゆえに、すなわち死のゆえに、神の御子さえも死ななければならなかったのである。」しかし、もし女性がいなかったなら、人類は、神の御子が死ぬために、あるいは男たちに説教するために世に来られるのを、そもそも経験することができたでしょうか？

89 現代の神学的見解の多くは、テルトゥリアヌスの形成する手の跡を示しています。Lippincott's Biographical Dictionary の簡潔な記述を借りれば、「彼は同時代のキリスト者の間で大きな影響力を得た」からです。彼の著作のかなりの数が今日まで残っています。女性についてそのような見方（永続的な「罪責」によって、キリストの贖いのいけにえの功績にあずかることから締め出されている、という見方）から出発するなら、これから私たちが考える次の聖書箇所（創世記3:16）

が、タルムードとテルトゥリアヌスの教えと一致して、女性という性全体に対する神の永遠ののろいとして解釈されてきたのも不思議ではありません。

第46課——パウロの論理のための不要な弁解

346 では、パウロは大きな危機的状況にふさわしい助言を与えているのであって、女性の永続的な沈黙と従属を主張しているのではないという、この理解に代わるものとして、私たちにはどのような選択肢があるのでしょうか？ 注解者たちによれば、それは結局、一方でユダヤ主義者たちの「ユダヤ人の作り話」と闘うのにあれほど多くの時間を費やした使徒が、他方では自分自身がまさにその学派から非常に深い影響を受けていた、と言うことに帰着します。というのも、他の人々が自分たちに都合のよい詭弁をパウロの教えに混ぜ込んだのだと結論しない限り、パウロがここでいいかげんなユダヤ的詭弁を気前よく用いて論じている、という描き方は避けられないからです。たとえばカルヴァン（Calvin）は、「アダムが先に形造られた」という論拠について、こう書いています。「しかし、パウロがその理由として挙げていること、すなわち女が創造の順序において二番目であったということは、女の従属を支持する非常に強い論拠とは思われない。なぜなら、バプテスマのヨハネは時間的順序においてはキリストより先であったが、地位においてははるかに劣っていたからである。」——そしてカルヴァンはこう付け加えることもできたでしょう。「どの男にも、彼自身より先に造られた母がいるが、それでも彼女は劣った者と見なされている。」あるいは、パウロが最初の創造の行為に言及したのだとすれば、「雌牛は男より先に、それどころか神学者よりも先に造られた。——男は雌牛に従属しなければならない」ということにもなります。私としては、パウロがふさわしくない詭弁を用いたと信じるよりも、注解者がそれを用いたと考えるほうを選びます。

347 パウロがラビの教えを押しつけているという見方に従うなら、カーリッシュ（Kalisch）が書いているように、「新約聖書は……旧約聖書よりもさらに厳しい。なぜなら、新約聖書は女に、静かに、よく従う心をもって学び、教えることも男を支配することもせず、むしろ黙っているように命じているが、旧約聖書においては、女はミリアム、デボラ、フルダのように、最高の教職、すなわち預言者の職に就くことが許されていたからである」ということになります。しかし私は、「福音」という言葉——「良い知らせ」——が、旧約聖書の律法によっても課されなかったような仕方で女性に抑圧を告げているなどと信じるよりは、むしろ注解者が誤っていると信じたいと思います。

348 注解者は時に、パウロの指示には満足しながらも、その論じ方に居心地の悪さを感じて、パウロのために弁解しようとします。レイノルズ（Reynolds）教授は13節についてこう言っています。「この論拠は、女性が知的優越を僭称することをとがめるのに用いられるとき、私たちの耳にはこじつけのように聞こえるかもしれない。しかし当時は、ほとんどあらゆる哲学的見解の具体的な表現を聖書の中に探し求め、見いだすのが一般的な方法であった。」これは非常に賢明に聞こえます。しかし私は、聖霊がパウロの書簡を書かせたと信じることに慣れています。そして私は、御霊が、女性の沈黙と従属の理由を根拠づけるために、ラビのたわごとを研究する必要があった

とは信じません。ここでパウロに帰されているような論拠でパウロが満足できたとすれば、それより前に、筋の通った理由の欠如はまことに致命的なものだったに違いありません！

349 力強い論理をもってローマ人への手紙を書き、ヘブル人への手紙の明快な論証を自ら書いたか、あるいはそれを書いた人の教師であった使徒が、女性を黙らせる口実を見つけるために、彼自身が軽蔑を込めて「ユダヤ人の作り話」と呼び――そしてテモテにそれを避けるよう警告した――ものに頼る必要はありませんでした。もし彼が女性を黙らせたかったのなら、彼にはそのための誠実な理由があったはずですし、その理由を述べるのにふさわしいことばを見つけることもできたはずです。パウロのための見苦しい弁解によって詭弁を支え続けようとすることで、パウロを嘲笑の的にし、聖書をその価値についての不信にさらしている人々には、重い責任がかかっています。使徒が、あるいは聖書全般が、弁解を必要としているなどということには、私は一瞬たりとも同意しないでしょう。注解者たちが、利己的で先入観に基づいた結論を証明しようとする試みをやめる気になりさえすれば、パウロのことばは完全に明らかになり、キリスト教的な意味で筋の通ったものとなります。私は、パウロが女性の男性への従属を主張したのではないこと、またエバがアダムよりも罪深かったと主張したのでもないことを示してきました。彼は、不利な状況の下で教会と女性に特別な危険があったので、教会における女性の一時的な「静かさ」を勧めたにすぎません。ネロの迫害が進行中であり、キリスト者の女性たちの貞節が脅かされていたのです。

> 「もしパウロが女性を黙らせたかったのなら、彼はそのための誠実な理由を挙げたはずですし、その理由を述べるのにふさわしいことばを見つけたはずです。」

350 それにもかかわらず、ラムゼイ（Ramsay）教授は、パウロがすべての時代のすべての女性を黙らせ、従属させようとしたのだという結論に固執し続け、（The Expositor、1909年で）この箇所でのパウロのことばを次のように呼んでいます。

> 「……ユダヤ人が、聖書から論拠を引き出し、自分たちの主張する意見を裏づけるためにそのことばをねじ曲げ、苦しめるのが常であったことを示す奇妙な一例である。パウロは、直接的で誤りのない直観によってはっきりと見ている真理を表現するところでさえ、時に旧約聖書から、私たちにはひどく技巧的で、論証としてはほとんど価値がないように思われる論拠を持ち出してくる。ユダヤ的な思考は、私たちとはまったく違った仕方で論じた。そしてその論証の筋道によって、しばしば私たちを戸惑わせる。しかし私たちは、見解の真実さを論証の妥当性と同一視してはならないし、論拠にほとんど説得力がないからといって、その見解が真実でないと結論してはならない。したがって、アダムとエバのふるまいから導き出される論拠は、私たちの思考には訴えかけず、私たちにはほとんど理解できないものとして、脇に置いてよい。そしてそれが理解できる限りにおいても、それは現代の読者の判断においてパウロの主張を強めることはできない。しかし彼の主張は、その論証からはまったく独立しているのである。」

351 「現代の読者の判断において」、女性の従属と沈黙という主張が、パウロに帰されている論証によって強められてこなかったことを、私はとてもうれしく思います。なぜなら今、私は、そのように弱い論証はそもそもパウロから出たものではなく、パウロのことばを歪めた者たちの仕業なのだということに、注解者がまもなく気づくだろうという希望を抱くからです。聖書をねじ曲

げたのはパウロではありません。人々がパウロの論証をねじ曲げて、聖書との調和から外してしまったのです。しかし解釈者たちがひとたびことばの中のねじれに気づき始めるなら、希望はあります。ラムゼイ教授は、パウロの論証は悪いが、その悪い論証からの彼の結論は真実だと考えています。しかし悪い木が良い実を結ぶことはできません。女性に対する男性の支配が、欠陥のある権利証書によって手に入れた財産のようなものだとひとたび認められるなら、男性は自分のやましい良心に逆らって闘うことはできません。そして女性の側には神がおられます。そこから私たちはこう結論します。二つの可能性――（1）パウロはまったく別のことを主張していたと認めるか、それとも（2）パウロは（女性の沈黙と従属のために）聖書をねじ曲げることによって不誠実に論じたと主張するか――のうち、後者の見方を退け、前者を受け入れることのほうが、パウロに対してはるかに敬意を払うことであり、神とその御ことばに対してはるかに畏敬に満ちたことなのです。

352 私は、女性についてテモテに語ったパウロのことばの中に、彼がラビの詭弁を受け継いでいるという考えとはまったく反対に、首尾一貫したふさわしい意味を見いだせることを示してきました。しかしラムゼイ教授は、他の似たような見解を引用するまでもなく、女性は男性に従属するという（ラビ主義から受け継いだ）教えを裏づけるために、パウロが「技巧的で奇妙な論じ方」をしたと非難しています。このテモテへの手紙の本文を用いてそのような教えを押し通すために、技巧的で奇妙な論じ方が用いられてきたことは、誰も否定できません。それは明らかです。しかし私は、神のことばが歪められたことについてパウロに責任があるということは否定します。私は、責任は初代教会の中の「ユダヤ主義者」たちにあると見ています。そして男性の注解者たちが、（おそらくは無意識の）自己本位な理由から、「ユダヤ主義者」たちのこの出来合いの、技巧的で奇妙な論証を受け継いできたのです。その教会への有害な影響と、パウロ自身はその宣教の全期間を通じて日々闘っていました。彼は彼らについて、次のように警告し、預言しました。「私が去った後、凶暴な狼があなたがたの中に入り込んで、容赦なく群れを荒らし回ることを、私は知っています」（使徒20:29）。彼はいくつもの手紙の中で、数えきれないほど彼らとその教えを告発しました。そしてパウロの後、ペテロは、パウロの手紙のことばを「曲解して、自分自身に滅びを招く」者たちについて、キリスト者たちに警告しました（II ペテロ3:15–16）。

353 パウロはコリント人への手紙第二4章1–2節で自分についてこう言っています。「こういうわけで、私たちはこの務めについているので、……〔私たちは〕恥ずべき隠し事を捨て、ずる賢い歩みをせず、神のことばを曲げず……。」 ですから、パウロが当時の「ユダヤ主義者」たちを特徴づけていたような「技巧的で奇妙な論証」に陥ったという見方を受け入れるためには、私たちは、パウロが（ラムゼイ教授のことばを借りれば）「聖書のことばをねじ曲げ、苦しめる」ということよりも、はるかに多くのことを信じなければなりません。パウロの書簡を霊感した聖霊が偽りの霊に席を譲ったのであり、パウロは自分自身についてこの言明を書いたとき誠実ではなかった、と信じなければならないのです。しかし私は、パウロについてそのような考えを持ってはいません。

第47課――夫が「かしら」であることについての結びの考察

354 では、夫が「かしら」であることが男性の支配を意味しないのなら、なぜ妻は夫に「服従」するように求められ、夫は妻にそう求められないのでしょうか？ それは、「服従」という言葉の本来の意味が、隷属ではなく和解に関わるものだからです。不正がまかり通っているところ、あるいはそれが疑われるところでは、キリスト教のやり方は常に、不利な立場にある側に、できることなら悪を行う者が考えを改めるまで、平和を求めて努めるよう勧めることです。この点について、ペテロの手紙第一2章18–23節を読んでください。3章1節へのつながり、特に「同じように」という言葉に注意してください。求められている「服従」は、強情で信仰のない夫に向けられたものです。同じように使徒パウロもエペソ人への手紙5章で、不当な扱いを受けやすい妻には「服従」という言葉にまとめられる一連の務めを、そして夫には別の一連の務めを勧めています。夫のほうが抑圧に傾きやすい者だからです。夫は、相手の益のために自分を差し出す、あの愛を示すべきなのです。

355 しかし注解者は、パウロが「服従」という言葉を用いた意図を誤って解釈しています。そのことは次のように例えることができます。中国では何世紀にもわたって、母親たちが、娘を結婚市場に備えさせるために、その足を縛らなければならないと感じてきました。この慣習は今、キリスト教信仰の人道的な影響を受けて衰えつつあり、母親たちは家族の男性たちの支持を得て、娘の足を縛ることを拒み、しばしば自分自身の足の布もほどいています。しかし、足が自由であることは、足を一度も縛られたことのない娘にとってと、何年も縛られてきた母親にとってとでは、まったく別のことなのです。その理由は、足をあれほど弱らせ、変形させてきたまさにその包帯が、時がたつうちに、弱った手足にとって欠かせない支えになってしまっているからです。ですから宣教医は、中国人の母親の足をほどくとき、古い包帯を取り除き、それから新しい包帯を巻かなければなりません。――今度は、一本一本の指をそれぞれの添え木に結びつけるのです。――ただし、足がどんな支えからも解放されるようになるまでの間だけです。

356 後者も確かに縛る処置ではありますが、それは元の纏足とは正反対の意図をもって行われます。それは失われた自由の回復を目指すものであり、古いやり方は攻撃的・侵略的に自由を奪うものでした。ちなみにそれは、本来、足を一度も縛られたことのない娘にはまったく不向きな処置です。では、医師が完全な自由を目指して行うこの一時的な処置のゆえに、医師が纏足を有益なものと見なしていると考えるのは、公正でしょうか、真実でしょうか？ ところが、まさにこのような意味で、男性の支配を正当化しようとする人々によって、パウロは誤って解釈されてきたのです。彼らはパウロが明言している目的を無視します。「神の子どもたちの栄光の自由」についての、他の箇所での彼の明確な言明に対しては沈黙します。パウロが自分のことばを守るために付けている警告を軽んじ、その意味をねじ曲げるのです。

357 「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません」といった言明は、彼らの理解ではほとんど権威を持ちません。ところが、パウロが妻に、夫が彼女の「かしら」（「支え」、第282段落参照）であることを二度思い起こさせたからというので、これらの解釈者たちは、パウロが女性たちの曲がった背中から取り除こうとした抑圧の重荷を、女性たちに永久に再び負わせようとするのです。使徒の意図をこのように誤って描くことによって、多くの人々が

聖書とパウロを不遜にもあざけるようになりました。そしてその責任は、パウロの意味したことを歪めた者たちが負っているのです。パウロは「年老いた独身男」として語っているのではなく、神の代弁者として語っています。また彼は、ラビの教育の毒気のもとで働いているのでもありません。パウロは聖霊の影響のもとで語っており、彼を正しく理解しようとする人々は、御霊の助けによって容易に彼を理解することができます。彼のことばをそれ以外の仕方で描くことは、どれも不遜なことです。

358 使徒は、異教の政府の下で、また女性にとって不公正な民法の下での困難をよくわきまえていたので、まず次のように説明します。教会の中では抑圧の包帯は取り除かれなければならないが、結婚の絆は注意深く守られなければならない（「結婚がすべての点で尊ばれるようにしなさい」）。妻たちは忍耐強くなければならない。そして夫たちは、たとえを続けるなら、折れて砕かれたそれぞれの女性のために、いわば一本一本の添え木の役を果たさなければならない、と。キリスト教的な愛の革命的な倫理が、まもなくそれ以外のすべてをもたらしたことでしょう。パウロはその主と同じように、その福音によって「捕らわれ人には解放を告げる」ために来たのです。――捕らわれ人に捕らわれを告げるためではありません。女性に対するパウロの目標は、男性に対するのと同じく、「神の子どもたちの栄光の自由」です。そして彼はそれをさまざまな面からくり返し説明しています。そしていったん女性がこの目標に到達すれば、その方法は時代遅れとなり、意味を失います。キリスト教国において、真にキリスト教的な家庭において、妻に夫に「服従」するよう特別に命じることは場違いです。――その方法はすでにその働きを終えたのです。抑圧は消え去り、自由が打ち立てられたのです。

359 では、エペソ人への手紙5章22節を見てみましょう。「妻たちよ、〔服従しなさい〕自分の夫に、主に対するように。」 まず、かっこに入れた言葉が原文には存在しないことに注意してください。妻たちには、21節ですでにすべてのキリスト者に課されたのと同じ務めが課されているのです。そしてそれは、妻の務めを際限なく広げることではなく、それを限定することを意味しています。その形はコロサイ人への手紙3章18節に対応しており、そこには同じ務めの一覧が見られます。「……主にあってふさわしいように。」 パウロにとって、服従は「ふさわしい」ことの限度を超えることがありえました。というのも、偽兄弟たちが彼のもとに来て悪い助言をしたとき、彼はこう言明したからです。「私たちは一時も、服従して彼らに譲歩することはありませんでした。」そうです、ペテロもそうしたように（Ⅰペテロ5:5）、すべての信仰者に「互いに従う」よう教えたこの使徒は、ペテロについてさえこう言っています。私は「面と向かって彼に抗議しました。彼は自分のふるまいによって責められるべきだったからです」（ガラテヤ2:3–5、11）。他の人への無条件の服従は、男性のキリスト者にも女性のキリスト者にも、聖書によって課されたことは一度もありません。

> 「他の人への無条件の服従は、男性のキリスト者にも女性のキリスト者にも、聖書によって課されたことは一度もありません。」

360 詩人ジョン・ミルトン（John Milton）は、使徒パウロとはまったく異なる教えを女性について主張しています。

> “To whom thus Eve, with perfect beauty adorn’d:

> ‘My author and disposer, what thou bidd’st
> Unargued I obey: so God ordains;
> God is thy law, thou mine; to know no more
> Is woman’s happiest knowledge, and her praise.’”
> 〔完全な美しさで飾られたエバは、彼にこう語る。
> 『わが造り主にして支配者よ、あなたの命じることに
> 私は異を唱えずに従います。神がそう定められたのです。
> 神はあなたの律法、あなたは私の律法。それ以上を知らないことこそ
> 女の最も幸いな知識であり、女の誉れなのです。』〕

このような教えは、男性を神の位置に置くものです。それは、「神の宮に座り、自分こそ神であると宣言する」（II テサロニケ2:4）反キリストの霊です。それはまた女性に、神にとってあらゆる罪の中で最も忌まわしい罪、すなわち偶像礼拝を教えるものです。

361 使徒が夫たちに、夫として特に「服従」を課していないとすれば、それは、夫にさらに重要な務めを心に留めさせる理由があるからです。エペソ人への手紙のこの段落の23節で、彼は夫に、その主と同じように、妻のために「からだの救い主」であるべきだと言っています。パウロは、彼女がどれほど自由で汚れのない者であってほしいと願っていることでしょう！ 25節は、キリストの模範にならって、彼女のために自分を完全に捨てることを教えています。26節は、夫自身のきよめられ聖別された肉の性質によって、妻のからだを「きよめて、聖なるものとする」ことを、それは最後に彼女を「しみやしわのない」（27節）者として、すなわち夫のふるまいによるあらゆる道徳的な害から解放された者としてキリストの前に立たせることができるためです。28節は、夫が自分のからだを愛するように妻を愛すること、すなわち彼女を養い、大切に世話することを教えています。その反対のふるまい――情欲による抑圧――は、彼女を憎むことを意味します。31節。彼が（彼女ではなく）他のすべての者を離れ、彼女だけと結ばれるべきなのです（第45–64段落参照）。

362 キリスト教会における女性の唯一の世紀は、使徒時代と、それを少し過ぎたころまででした。ラムゼイ教授は、その価値ある著書 The Church in the Roman Empire の中でこう書いています。

> 「普遍的でカトリック的な型のキリスト教は、女性の重要性と公的な奉仕に対する嫌悪において固まっていった。嫌悪は憎悪となった。そしてその嫌悪は一世紀にまでさかのぼり、二世紀の半ば以前に憎悪にまで高まった可能性が高い。」

この憎悪が増すにつれて、女性の沈黙と従属の正当化を見つけるために、考えうるあらゆる努力が払われたであろうことは確かです。そして「ユダヤ主義者」が、聖書、とりわけパウロのことばを、ゆがめねじ曲げることによってそのようなことを教えさせる方法を提供しようと待ち構えていました。ここに私たちは、わずかなことばで、あの「技巧的で奇妙な論証」の歴史を見ることができます。それは、パウロが述べた論拠から見せかけの結論を引き出すことを可能にするもの

です。しかしその論拠は、正しく読まれ、偏見のない心で解釈されるなら、使徒パウロと「女性問題」に関する彼の教えについて、まったく異なる評価へと導くはずなのです。

> 「キリスト教会における女性の唯一の世紀は、使徒時代と、それを少し過ぎたころまででした。」

第66課――キリスト教的家庭を築く

519 旧約聖書について通常用いられている年代表（アッシャー〔Usher〕のもの）によれば、アブラハムは紀元前1996年に生まれ、サラは十歳年下でした（創世記17:17）。ですからこの信仰の家は、私たちがキリストの後に生きているのとほぼ同じくらい、キリストより前に生きていたことになります。同じ年代表は、勝利をもたらす子孫の約束が与えられたエバの時代を紀元前4004年に置いており、こうしてアブラハムとサラの時代を、あの記念すべき約束と女の子孫の誕生とのほぼ中間に位置づけています。

520 エバの時代からアブラハム（初めはアブラムと呼ばれていました）に至るまで、神は明らかに、男の子孫を、来るべきメシアの系図に関わるものとしては考慮しておられませんでした。その間に人類は、少なくとも世界のその地域では、子孫を女系で数えることを廃止してしまいました。そして太古の女性の尊厳を特徴づけていた多くのものが消えていきました。しかし、来るべきメシアの足跡は、彼が女の子孫であるという一般的な言明に加えて、何らかの方法で記録されなければなりませんでした。そして今、彼が現れるときに属することになる民族について、光が差し始めます。同時に神のお考えは、この民族が彼を迎えるように備えることでした。

521 アブラハムとその妻サラは、偶像を礼拝する親族のもとから出て行くように召されました（創世記12:1–5、ヨシュア記24:2–3）。カナンに着くと、神は彼らの宗教教育を始められました。彼らの希望をより高い次元に置き、それを将来の子孫と結びつけるためです。私たちは、かつて異教徒であったこの家族が、あらゆる時代のまことの信仰のすべての家の頭として備えられていった過程を、注意深く学ぶのがよいでしょう。この家族は最初のキリスト教的家庭と呼んでも差し支えありません。この家族は、（エバがそうしたように）来るべきキリストを信じるように教えられたからです。――ちょうど私たちが、すでに来られ、また再び来られるキリストを信じているのと同じように。

522 私たちは、アメリカの大都市にたくさんあり、今では大洋の両側でますます頻繁に見られるようになった、非常に高い建物がどのように建てられるかを何度も見てきました。その構造は小さな建物とはまったく異なります。まず、深く強固な基礎のための場所をつくるために、はるかに多くの土が掘り出されます。そして梁や垂木はすべて鉄製で、橋梁建設のやり方でしっかりとリベット留めされています。神は、最初の信仰の家を、あらゆる時代のキリスト教的家庭の模範として基礎づけ、建て上げようとされました。神は深く掘り、大きな礎石をしっかりと据え、建物のすべての梁をしっかりとリベットで留め合わされました。神がどのように事を進められたかを調べてみましょう。

523 神はアブラハムに、天の星のように数多くの子孫を約束しておられながら、同時にサラにはただ一人の子を産むことさえ許されません。神は、アブラハムが父となるように整えるのに百年を、サラを母となるにふさわしくするのに九十年を要されました。「悪しき者は、風が吹き飛ばす籾殻のようだ」と神は言われ、また「肉によって生まれた者は肉です」と言われます。立派な家系を単なる籾殻の上に築く者はいません。聖書は私たちにこう教えています。神が数多くの子孫を望まれるとき、神は子孫を生むことの采配をご自身の管理の下に置かれるのです。すべては質にかかっています。イシュマエル人やペリシテ人の大家族は世界にとって祝福ではありません。そしてそのような家族はいずれにせよ長続きしません。悪徳、犯罪、戦争がやがてそれを滅亡の淵へと追いやるのです。

524 「アブラムの妻サライは、彼に子を産んでいなかった」（創世記16:1）。一方には「地のちりのような子孫」（創世記13:16）、それほど数多い子孫の約束があり、他方には不妊の妻がいました。それは何を意味していたのでしょうか？ まさにこういうことです。たとえ量が望まれている目標であっても、神にとっては質がすべてなのです。おそらくアブラハムにとっては、何よりもまずサラの美しさを楽しむ官能的な喜びが前面にあったのでしょう（創世記12:11–14）。その背後には、異教徒のアブラムに異母妹と結婚させた肉の欲望が潜んでいました。それから、神の導きと約束に触発された未来への眼差しがそれに混じり合い、アブラハムは、手に入れた富を残すことができ、自分の名を永遠に伝えてくれる跡継ぎを望むようになりました（創世記13:2、15:3）。それから神は彼の憧れを、カナンよりも美しい世界へと――「堅い基礎の上に建てられた都、神が設計し建設された都」（ヘブル11:10）へと――引き上げられました。そしてついに、彼の肉体があらゆる官能的な欲望に対して「死んだも同然」になった後（ローマ4:19）、一人の息子が生まれました。――世界を祝福したいという聖なる願いから、彼の子孫についての神の約束の成就として（創世記12:3、22:18）。この聖なる願いは、アブラハムとサラを通して世界を祝福しようという神の願いと一致していたのです。

> 「たとえ量が望まれている目標であっても、神にとっては質がすべてなのです。」

525 このことは注目に値します。そしてそれは、イサクがリベカと結婚したとき、肉の欲望がより高い志によって押しのけられるまで、リベカもまた子を産むことを許されなかったことを思い起こさせます。アブラハムの約束の継承者イサクは、「自分の妻のために主に祈った。彼女が不妊の女であったからである。主は彼の祈りに答えられた」（創世記25:21）。――こうしてエサウとヤコブが生まれました。地のすべての部族を祝福するというアブラハムへの約束は、彼らの場合にはヤコブへと移されました。そしてヤコブが自分で選んだ妻ラケルもまた、そのために祈るまで子を産むことができませんでした。将来を期待される子孫の誕生には、官能的な欲望や人間的な野心よりも大きな何かが流れ込まなければならなかったのです。「神はラケルに心を留められた。神は彼女の願いを聞き入れて」（創世記30:22）、彼女は、その人格に何の欠点も記されていないヨセフを産みました。家族全員を飢え死にから救った、注目すべき人物です。彼の息子たち、エフライムとマナセは、二つの部族の長となり、その周りに他の八部族が集まって、イスラエルの十部族を形づくりました。そのため、「ユダ」と区別される「イスラエル」は、旧約の歴史の後の時代の預言者たちによって、しばしば「エフライム」と呼ばれるのです（エレミヤ31:18など）。

> 「将来を期待される子孫の誕生には、官能的な欲望や人間的な野心よりも大きな何かが流れ込まなければならなかったのです。」

526 神がイスラエルのために救い手を望まれたときも、また同じでした。サムソンの母は「不妊の女で、子を産んだことがなかった」のです。そしてついに御使いが彼女に現れ、生まれて来る子について指示を与えたとき、彼女と夫がこの件について祈っていたと考える理由があります。――とりわけ、父マノアが、生まれて来る子の育て方について、より具体的な導きを求めて祈ったことを私たちは知っているからです（士師記13:8）。それから私たちは、預言者の学校の創設者サムエルという、際立って美しい人格に至ります。彼は肉の欲望への答えとしてではなく、ハンナの熱心な祈りへの答えとして生まれました（Ⅰサムエル1:20）。神は（この場合にも）彼女の願いが聖められるまで、彼女が子を産むことを妨げられたのです。特に記録されてはいなくても、昔、重要な子どもたちを産んだ他の多くの母親たちも、同じことを経験したかもしれません。

527 さて新約聖書に進み、エリサベツの経験から同じ教訓を学びましょう。神は、キリストがこの世に来られることの先駆けを備えようとしておられました。神はザカリヤとエリサベツの家族を選び、すぐに肉の子を得る可能性を閉ざされました。エリサベツが、聖なる、性愛によらない願いから生まれる子を産むことができるためです。神は長い間――あらゆる肉の欲望がやむまで――待たれました。それから御使いが遣わされ、二人にこう告げました。「恐れることはありません、ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。……その子は主の御前に大いなる者となるからです。……まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ」（ルカ1:13–15）。こうして偉大な人々がこの世に生まれてきました。すなわち、神の前に偉大な人々です。たとえ世が彼らを軽んじるとしてもです。ヘロデがバプテスマのヨハネを軽んじ、まず牢に入れ、それから首をはねたように。

> 「こうして偉大な人々がこの世に生まれてきました。すなわち、神の前に偉大な人々です。たとえ世が彼らを軽んじるとしてもです。」

補足

聖なる子孫の親たちに対する神の取り扱いの意図と、「産児制限」のための近代的な器具によって追求されている目的との間には、極めて注目すべき違いがあります。二つの段階の欲求が、表に現れようとして競い合っています。そして神は、聖なる子孫のためには、肉の欲求が過ぎ去り、祈りと願いのうちに霊的に表される子孫への憧れによって置き換えられるように定められます。それとは対照的に、近代の人間が作った器具は、子孫への憧れの表れを弱め、無責任な肉の欲求を思うままに走らせます。そのような結びつきから生まれる子は、もし最終的に生まれることが許されたとしても、まさに「卑しい生まれ」と言うべきものとなるでしょう。

第100課――長子の権利か、一杯の煮物か？

829 タルムードの「エバの十ののろい」（第106段落参照）に由来する、神はエバの罪のゆえに女性を特定の時期に苦しみをもって罰する、というあの誤った教えは、悪意に満ちた残酷な迷信であって、聖書に支持されておらず、私たちの知性にふさわしくないものです。創世記3章16節は、

この節がゆがめられ、誤って「あなたの欲求はあなたの夫に向かうべし」（ルター訳〔ドイツ語聖書翻訳〕）と読まれるとき、結婚関係における男性の利己的で偽善的な情欲の隠れみのとなります。ちなみにこの教えは神の正義の戯画でもあります。男性も女性と同じようにエバの子孫ではないでしょうか？ この教えでは、罰は罪に応じてではなく性別に応じて下されます。そして人がどちらの性に生まれるかについては、神ご自身だけが責任を負っておられるのです。

830 さらに、エバが罪を犯したのだから、女性は教会でいつまでも「黙って」いなければならず、夫に服従しなければならず、決して教えたり説教したりしようとしてはならない、という教えは、贖いの教理を破壊し、キリストの死がすべての人の罪を、もちろんエバの罪をも贖ったという栄誉をキリストから奪うものです。それはプロテスタンティズムの精神とまったく矛盾しています。ルター（Luther）はこう言っています。「私たちの罪について、自分で神の義を満足させようと努めるのは大きな誤りである。神は常に、計り知れない恵みをもって、自由に罪を赦してくださるからである。」

831 それなのに、驚くべきことに、ルターは他の人々と同じく、女性のための「自由な恵み」という考えを決して理解しなかったようです。彼はこう言ったと伝えられています。「産褥での死は、神の尊い業と服従のうちに死ぬことにほかならない。たとえ女たちが子を産み続けて疲れ果て、ついには死んでしまっても、それは何の害にもならない。死ぬまで産ませておけばよい。彼女たちはそのためにいるのだ。」ルターは「良心の自由」を非常に重んじましたが、女性については次のように言いました。「女は夫なしには何事も始めることも、成し遂げることもできない。夫のいる所に女もいなければならず、主人に対するように夫の前に身をかがめなければならない。女は夫を恐れ、夫に服従し、従うのである。」彼は女性には「良心の自由」の余地を残しませんでした。

832 ルターは、聖書解釈者たちの一般的な論調の例外ではありません。発言の点では、他の何人かよりもいくらか激しいかもしれません。幸いなことに、女性たちは、説教者たちが宣べ伝える「自由な恵み」を聞いたとき、それを自分たちのものとして受け入れました。そしてパウロの教えとされているものに反して、近年、女性たちは教会の公の集会に参加するよう励まされてきました。女性たちが参加しないと集会が退屈だということがわかったからです。しかし教会には、自分自身の実践によって無視している教えの流れを支持する、どんな権利があるのでしょうか？ 教会は、実践を変えるか、それともこれらの教えを注解書から消し去るか、どちらにしても両者を何らかの仕方で一致させるべき時ではないでしょうか？ 自分たち自身の実践、すなわち公の集会への参加と、一般に聖書の教えだとされているものとの間に、この和解をもたらす務めは、とりわけ女性たちに課されています。

833 しかし、もし私たちが、エバの罪のゆえに神がエバの属していた性全体に滅ぼす御手を置かれた、という考えを私たちの信仰と教えから追放するなら、蛇の頭を打ち砕く女の子孫についての約束がすべての女性のものであるという教えはどうなるのでしょうか？ 違いはこうです。創世記3章16節の悲しい預言は、女性たちの肉体的に受け継がれた苦しみと悩みの中で、あふれるほどに成就してきました。創世記3章15節の栄光ある預言もまた、あふれるほどに成就するでしょう。しかしそれは肉体的な遺伝によってではなく、自由な選択によってなのです。

834 預言は宿命ではありません。女の子孫が蛇の頭を打ち砕くというこの預言の成就という栄光ある運命に、どの女性も定められているわけではありません。それは私の意志に反して、ただ私の上に降りかかってくるようなものではありません――私が何をしようと、来るべきものを誇ることができる、というようなものではないのです。私たちに告げられているのは、ある女性たちが、キリスト・イエスにある神の上に召してくださる召しの賞を勝ち取るということだけです。そしてもし私がその人々に加わらないなら、賞が私の前にあったのに私がそれを軽んじたのですから、私の屈辱と最終的な罰はいっそう大きなものとなるでしょう。

835 すでに述べたように、聖書全体の中で、エサウの罪ほど人々の軽蔑にさらされている罪はありません。彼には長子の権利が約束されており、その長子の権利に関連して、父の預言的な祝福が約束されていました。しかしそれらは将来のことであって、その到来は長く遅れるかもしれませんでした。一方彼は、肉体の食欲を満たすことを差し迫って必要だと感じていました。彼は、キリストがこの世に来られる血筋に立つこともできたのです。しかしキリストはまだ長い間来られませんでした。――そうです、さらにおよそ十七世紀もの間、来られなかったのです。エサウは一杯のレンズ豆の煮物と引き替えに、長子の権利を売りました。

836 新約聖書は彼を「一杯の食物と引き替えに自分の長子の権利を売った俗悪な者」と呼び、こう付け加えています。「あなたがたが知っているとおり、彼は後になって祝福を受け継ぎたいと思ったのですが、退けられました」（ヘブル12:16–17）。長子の権利の継承者である彼の上にとどまるはずだった父の祝福は、彼の地上での幸福に大いに寄与したことでしょう。しかしその権利を売ってしまった後、彼はその祝福を受け継ぐことができませんでした。その行為はずっと前になされていたのです。もはや変更の余地はありませんでした。彼は一杯の煮物を得ましたが、父の財産の二倍の分け前と、家族の中での名誉ある地位を失いました。イサクは、ヤコブの上に告げた長子の祝福を、エサウに移し戻そうとはしませんでした。私が思うに、イサクは、エサウにとって大事なのは地上の利益だけだということを悟っていたのです。

837 エサウのふるまいと、同じヘブル人への手紙の著者が次のように書いているモーセのふるまいとの対比ほど、大きな対比を描くことはできないでしょう。「信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、……キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました」。その宝は、彼が楽しむために足もとに置かれていたのです（ヘブル11:24–26）。想像してみてください！ エジプト人のあらゆる知恵を教え込まれた、王の娘の息子である、あの洗練されたモーセが！ 彼はすべてに背を向け、エジプト人の奴隷たちの側に立つのです！ なんという狂信者でしょう！ 彼はキリストを待ち望み、キリストが来られる千五百年も前に、このキリストのために全世界を犠牲にするのです！

838 では、私たちの時代の女性たちは何をするでしょうか？ 彼女たちはこう言うでしょうか。「その見通しは遠すぎて、私には魅力がありません。大きな努力と多くの自己否定によって、私の生きている間に何か価値のあることが達成できるとわかるなら、話は別です。でも、世界の福音化とキリストの来臨を早めるために私ができるわずかなことは、何の違いも生まないでしょう。私は公の場で教えたり、説教したり、祈ったりすることに関心がありません。キリストが再び来られるといつも告げているのに、いつまでたっても来られない、そんな人たちの仲間にはな

りたくありません。あの人たちは笑い者です。私は彼らに加わることはできません。」そのような人々は、「キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と考え」はしないのです。

> 「私たちの時代の女性たちは何をするでしょうか？ 彼女たちは『その見通しは遠すぎて、私には魅力がありません』と言うでしょうか？」

839 私たちはどちらの仲間に入るのでしょうか？ それは、私たち女性の一人ひとりが答えなければならない問いです。この件では、どっちつかずでいても何の役にも立ちません。大きな約束と預言――聖書全体で最も大きなもの――が、私たち女性の前に置かれています。逃げ道はありません。私たちは、最も高い視点から見て最善のものを選ぶか、さもなければ自分がエサウであることを示すか、どちらかなのです。神は私たちの信仰に挑戦を突きつけられました。私たちは長子の権利を軽んじるのでしょうか？ 決してそうではありません！

創世記から黙示録まで、キャサリン・C・ブッシュネル（Katharine C. Bushnell）は、女性を扱う（ほぼ）すべての聖書箇所を徹底的に論じています。ヘブライ語とギリシア語の言語学者として、彼女はそれらの箇所を原語と歴史的文脈の中で研究し、聖書翻訳者たちによって時に覆い隠されてきた洞察に行き当たります。本書は、女性のための社会改革に生涯をかけたブッシュネルの努力から生まれました。その働きの中で彼女は、女性の地位と聖書の誤解との間のつながりに気づいたのです。研究者たちは、1921年の初版以来、彼女の画期的な著作に依拠しており、これを、教会、家庭、社会における女性の役割の問題に対する、聖書全体からの最良のアプローチの一つと見なしています。

目覚めよ、エバ――天はまもなくあなたの上に訪れるのだから！

キャサリン・C・ブッシュネル（1855–1946年）は、勇気と賜物にあふれた神のしもべであり、「私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです」という聖句を生涯のモットーとしていました。彼女は医師、宣教師、改革者、著述家、講演者であり、また七つの言語を話し、古典ギリシア語とヘブライ語を自在に使いこなした、卓越した独創的な学者でもありました。ブッシュネルは医療の道を離れ、自分がさらに重要だと考えた働きに身を投じました。すなわち、19世紀の女性運動の一翼を担った Women‘s Christian Temperance Union（WCTU、キリスト教婦人矯風会）で指導的な役割を担い、人々の屈辱的な生活条件を変えようとしたのです。女性の聖書的な立場は、ブッシュネルにとって非常に重要な問題でした。というのも彼女は、誤訳こそが女性の社会的・霊的な従属の原因になっているという結論に達したからです。1896年に彼女はWCTUを離れ、残りの生涯を、女性の完全な平等という、神の初めからの、そして変わることのない意図についての聖書的真理を書き記し、伝えるという務めに献げました。



100課から成る読書・学習用テキスト＋メモ欄つき

ISBN 978-3-94447-225-6 (RVB)

ISBN 978-3-86269-206-4 (VKW)

注

1. 「旧約聖書」「新約聖書」という語は長いので、以下の課では前者を「旧約」(AT)、後者を「新約」(NT) と略記します。また大文字のM.は、学習者に、その両方における節の欄外の読みを指し示します。
2. あの初期のヒビ人の間では、ハモルがディナを扱ったことは、実際に結婚を意味していました。ヤコブにほかにも娘たちがいたことは、創世記46章7節からわかります。
3. The Herods、15頁
4. タルムードには、ベン・シラからの引用が「四十を下らない」数含まれている――Lange's Commentaries、外典、276頁。